

求道

第九卷
第一號

明治四十五年二月一日發行（每月一回一日發行）

求道第九卷第壹號目次

雜 錄

●大草惠實師を悼む

近 角 常 觀

求 道

●三教會同に關する信仰的論斷

講 話

●親鸞聖人の德音

近 角 常 觀

告 白

●如來の悲願はかくの如きの我等
がためなりけり

加 藤 竹 三 郎

●御慈悲になれたる横着者

三 須 善 太 郎

講

求 道 學 舍

〔本郷區森川町一丁目〕

毎 日 曜 午 前 九 時

毎 土 曜 午 後 二 時

第 一 求 道 會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎 月 二 日 午 後 七 時

第 三 求 道 會

〔日本橋區淺草町説教所〕

求 道

第 九 卷
第 壹 號

三教會同に關する信仰的

論斷

床次氏が今度のやうな、三教會同と云ふ事を思ひ付いたのは、察する處氏が歐米を巡遊して、彼の國の社會を健全にするに就いて、宗教の信念なるものが、いかに多大なる感化を持つて居るかに感じたからであらう、此の動機になるべき事は、氏の歸來の著述にも見えて居る。而して日本の現状を見れば、諸方面に於て不満足な所が多い、思想も險惡である、感化救済事業などを遣つて見ても、個人の信仰が無い爲に、物質的のみに傾いて、其の本旨たる人道の上の信念が無い。此點に於て氏が歐米の現状に照し合せ、宗教を以て此の險惡な思潮界の現状を救はんとするのは、無理の無い思ひ付きである、又た精神的には、寧ろ非常に結構な着眼であると思ふ。尤も此事は氏のみに限らず、歐米を觀察して來た、大抵の人の一應感心するものであつて、而も床次氏は更に一層之

を切實に感じた。此點は自分も非常に氏の爲めに多とする所であるが、之と同時に、今ま之を日本に實行するに就いては、第一の根本義から、此度の企が本當の所へ行き盡して居らぬと云ふ憾みがあると思ふ。之が自分の思ふ第一の不満である。

好く世に云ふ政教分離と云ふことに就き、又教育と宗教の全く別々のものであることは自分が言はずとも、人が頻りに言ふことである。又た宗教家が國家の權力に依頼し、國家の權力に保護されるの不可なることも、亦言ふに及ばざることである。然し自分の思ふことは、然らば國家夫れ自身が、宗教を以て國民を指導して行く場合に、其の根本宗教に對し、如何なる考へを以て進み行くべきかと云ふことである。而して其の着眼と信念の如何によつて此度の企が成効ともなれば又た失敗ともなる。之をたとへば、若し、個人が一の確平なる信仰を得たならば、其人は之を中心として、其の思想、生活、其他、個人の有形無形のものを一として行くであらう、又た行くことが出来るであらう、又た一家族の内に、一の信仰を以て統一することが出来たならば、一家が一致されて行くであらう、之れが即ち信仰の力でもある、權威でもある。

従つて之を一國にしても、國民全體を導いて行くに就いては、一の統一した信念の下に於けると云ふことは、極めて必要なことであつて、必ずしも政治家自身が之を企てずとも、國內の重なる宗教が、國民全體の思潮を調攝して居ることは各國何くに在つても皆な然りである。英國には國立教會があり、獨逸にはルーテル派と、カルキン派がある、佛國にはガリガンチャーチがある。凡て此等の宗教は、其の歴史が極めて古いと共に、一國の歴史と交渉して、夫れ夫れ存在の理由を持つて居る。其の理由は色々異つたものがあるにせよ、兎に角一國の大體の思想と云ふものが、斯の如く統一された一の宗教の下にあると云ふことは、何處にも見られる例證である。此の意味では日本でも、別に新しい問題にせずとも、歴史を溯れば、宗教が日本の思想を長い間統一したことは極めて明瞭なる事蹟である。言ふにも及ばず諸外國と同様に佛教を以て國民思想を統一し來つたことは事實である。故に今回の問題に就いては、第一に考ふべきは此國民を統一すべき形式を破壊することが最も不可である。神佛耶を一堂に會するといふことが、表面公平に見えて宗教上より見れば極めて不可である。一時の政治上の權力を以て、之を強施しては可かぬ、宜

しく國民全體の永遠の問題として、篤くと考へねばならぬのである。此度の會同は思想統一の形式を破壊して、國民に信仰上疑惑を抱かしむるものである。即ち別の意味で云へば、今回の問題は、新たに宗教を拵へ出すのでは無く、既に在つた宗教を明治の形に於て鎔鑄することにある。偕て物を鎔るには適當なる鑄型がある、此の鑄型にして其の鑄らるべき材料に不當なるものであつたならば油々しき大事である。將來も過去の如く、佛教を以て國民を統一すべきことは、恰も西洋各國一定の教會を以て統一せるが如くなすべき筈なのに、漫に三教平等といふ様な鑄型を作りて、之を政府が國民に強めるといふにはならぬか、是最も不當なる事のみならず、油々しき一大事である。然らば其統一したる鑄型を作るものは何であるか、即ち今日の國民の心である。即ち宗教の新生命を國民の胸に宿さんとするには、先づ國民の心に自覺が有らねばならぬ。たとへば一個人が自覺し一身の生活に統一を保ち、一家族が自覺し家族の統一を保ち、國民が自覺して、始めて統一した思想と信念が得られるのである。然し此の自覺なるものは、政策や法律や權力で統一され、攪起さるべきものでは無い、他動では無い、自動である。即ち其の此處まで進んで來るには、

相應の自然と年月を待たねばならぬ。自分が十五年前信仰に入つたのも、亦た此の自覺によつて醗酵されたものであるが、個人として統一した信念が出來た頃、宗教法案が提出された。此立案の精神は當時の宗教に對して決して悪いもので無いと認めては居たが、但だ形式の上が神佛耶平等に取扱はれて居つた故に、其結果國民思想統一の上に破壊的な態度を取ることになるゆへ、佛教者に一時的利益があつても之を擲て、國家を正しき立場に立たせん爲めに大に反對をした。而して自分は其後十餘年間外に向つて叫ばずに、内に向つて信仰を説いた。畢竟個人の自覺が國家の自覺を促すことになるゆへ、十年一日の如く個人の自覺、信仰の統一と云ふものゝ爲めに奮闘もし、又た研究もした。若し今日であつても形式の束縛によつて國民の自覺を促かすことが出来るならば、自分は喜んで起つてあらう。然し自分の見る處、今日の國民の信仰上自覺は未だ其處まで達して居らぬ。而して一方之を促す政府當局者が、いかなる信念を以て之を率ゐて行かんとするか、個人の生活を一統する信仰なる者があるが、失禮ながら床次氏はそうした徹底した、信念を以て從事して居るものと認むることが出來ぬ。従つて今回の結果は却つて中途半端に終りはせぬか

と云ふ懸念が無いでも無い。單に夫れ許りでは無い、強いて之を行ふた後は、將來の宗教界に、無きに勝る混雜を來すことは無からうかとの杞憂も起る。或は斯う云ふ問題を、個人の自覺に待つなど云ふならば、餘りに氣の長い迂遠なことゝ笑ふ者もあるかも知れぬが、宗教を少しでも理解するものならば、必ず着眼を此處から持つて行かねばならぬ。宗教を權威あらしめ、宗教の信仰の前には、死生をも辭せじとの態度を立たせしめて行かうとするには、必ず此點に心を致さねばならぬ。眞の自覺は、必ず眞の信念の上に立つ可きもので、之れあつてこそ始めて宗教の權威は生ずるものである。然らば宗教をして權威あるものとなすには、是非此徹底したる自覺の信念に立たねばならぬ。少くとも此自覺と矛盾せざる態度を取らねばならぬ。しかるに神佛耶何れても可いといふ様な態度を事更に示すといふとは、國家自身が自覺なきことを表白するのみならず、國民に權威ある宗教的信念を起さしむる所以でない。寧ろ、從來存したる宗教の權威を破壊することになる。佛教各宗派を神道各派と一堂に會するすら、大教院の舊型に信仰上退却するが如き處ある上に、耶蘇教と會せしむるなど惡平等の態度である。政府自ら惡平等の態度

を取りながら、國民の思潮を導かんとするは矛盾である。此度の企は惡平等の宗教觀と、思想統一の政策と反對のものを二者強て結び付けんとしたる不徹底なる企である。南北朝問題に歴史の自由研究と北朝正統論とが妙な結び付をしたるが如く、三教會も一方に惡平等の宗教觀を標榜して、宗教をして權威あらしめんといふ、矛盾も亦甚しい。危險思想の如きは惡平等の思想が禍源である、政府自ら惡平等の態度を示して危險思想を妨がんとし、實に宗教的信念なき爲に氣の毒な企を思ひ付きたものじや。要するに政府當局其のものに徹底した自覺の無いと云ふことが、此の事の大障礙となるのである。

第二に宗教の各教各派を平等に會同せしめて何をするのであるか、之れは到底出來ぬ相談である、元來宗教の極致は、絶對なものであつて調和的のものでは無い。已に耶教を信する者にして、佛教を信すると云ひ、佛教信者にして、同時に耶教信者たりと云はゞ、夫れはもう何れの信者でも無い、又た信仰の超絶でも無い、寧ろ信仰の墮落である。墮落した信者は信者では無い、絶對無二、此處に宗教の有難さがある。凡てが根本から相違して居るので、一を信する者は二を信ず

土宗、眞宗の、同じ慈善事業に於てするも、善根功德と解するものと、佛に對する感謝と解するものと、其間に莫大な距離があるのである。併同一の佛の信念の下に相會することが出来る、然らば宗教の名の下に三教會同せよといふか知らぬが、宗教といへばとて、一點も相容るゝ餘地を見出さぬ。たとへば眞宗の信仰を有するものが、遠きオーガステンやルートの信仰を了解することは出来る、了解しても佛の信念を有するものは一毫もゴッダの信念を許すべき餘地がない。既に信念に於て其餘地なくんば、慈善事業等外面に顯はるゝ所は相似たりとするも、相會して語るべき餘地もなく、必要もなく、却て信仰上一種の強迫を感じるのである。此點より言へば神佛二教の代表者が耶教者との會同を拒むばかりでなく、眞面目なる耶教者ならば承知出来る筈はない。當局者は此の如き宗教者の信念を理解せずして、唯國家の立場からばかり考へて、信仰の強迫をして居ることに氣付かぬ様である。結局今回の企てによつて、政府が宗教の保護を爲し、宗教家は之によつて勢力を得るとやうに解する人もあるが、是は如何なる點まで善意を以て解すべきことであらうか。政府も宗教家も政策のみに着眼して、國家として又宗教者として自覺

ることが出來ぬ、狹隘な様であるが各國平和會議の様に他の存在を是認して、調和的に一堂に會すべき信仰上餘地がない。此處が即ち宗教の本質の道德上にも權威を生じ、又た國家の力とも成る所以である。夫れに各宗教と云ふものは、教理の上に、哲學の上に相違がある許りでは無い、其成立の歴史の上にも、相容るべからざる差別がある。たとへば耶教でも舊教と新教との今に至つて絶對に相容るゝことの出來ぬは何故であらう。新教の國教主義、舊教の教國主義、此の二つの事情の爲に、世界が無辜の血を流したことは幾千萬ぞ、然も如何なる平和主義者も、遂に此の二つを調和することは出來ぬでは無い乎。況んや飽までも歴史を異にし、哲學を異にし、教理を異にした三宗教を、同一の會同の下に纏めやうとするのは、如何なる力を以てしてするも不可能の事業である。勿論此度の企が根本義に相觸るゝのではないといふ辨解は承知して居るが、宗教者として根本義を離れて一言一行も出來ぬではないか。既に根本義に於て相容れなんだならば、各宗派の代表者として一堂に相會する信仰上餘地を見出さない。若し佛と耶とが同一だと云ふなら、夫れはもう眞の佛教でも無い、又た基督教でも無い。獨り三教とばかり云はぬ、同じ佛教の淨

の大問題を放擲して居らぬか。萬一此度の舉が、たとへば多少の便利はあるにしても、又た一方束縛の意味にも採られるとがあるだらう、實際政府の保護などを喜ぶものは俗人の事業であつて、精神事業を掌る宗教家などが、政府の力を後に負ふことを隨喜するなど云ふことは、餘り喜ぶべきことでは無い。況んや個人の自覺など云ふことは、そうした外向の勢力を以ては奈何ともし難いものだ。其様な政策問題は眼中に置くべきことではない、たとひ便利ながあつても、信念上出來ぬことは爲て成らぬ。爲政者も不徹底なる立場から國家をして惡平等なる宗教的態度を取らしむることになつたならば、國家百年の大計を誤るものである。然るに政府が此方面のことに想ひ到らずして一度企てたことから、何うしても成遂げやうとする結果、種々なる政策を採るに至らば、遂には一轉して政治問題となり、たしかに日本の宗教界を縦斷して相戦はしむるに終るであらう。嘗て政教問題の最後が此弊に陥るとを虞れて、十有餘年純信仰問題に盡瘁したのは國家の爲に之を憂ひたからである。然るに今政府自身が其禍根を作るといふは實に残念の至である。事小なりと雖此會同が成立せば宗教界未曾有の惡例を止むるに至るであらう。又たとへば

政略によつて、各宗の有力者を網羅し得たにしても、其の人々の間に無言の中に反感を起さしめることとなり、却つて各教の反目の因を爲さぬとも限らぬ。自分は政府が此の折角の企てを以て、政治上の争闘に終らしめざることを切に希望する。

之を概して、自分は今回の床次氏の企てに就いて、氏の誠意を諒とし、又た時に適した着意としては感服するが、然し其の根本に於て満足されぬ處があり、其の方式に於て、同意されぬ事が多い。斯う云ふ事の可能を信ずるは宗教界の素人の考へである。世論亦た紛々として其歸着を知らぬが、たとへば此の問題は此儘に立消えになつたに於て、之によつて宗教の國家に對する地位及び重味と云ふものを、一般國民の胸裏に印象すると共に、各宗教の現状と云ふものに、世間をして一顧せしめたと云ふことは、後日此問題が再び起つた時に對する、非常なる教訓を遺すべきものと思ふ。此の意味から國民として又宗教者として自覺を促すべき懸案として、男らしく、全然撤回して、他日の戒案を待つことに成つた方が百年の大計であることを斷言する。

講話

親鸞聖人の德音

(求道學會日曜講話)

近角 常 觀

今日は親鸞聖人の六百五十年の御正忌であります。我々幸にも此の値ひ難き佛法に値ひ、殊に尊き親鸞聖人の御化導の趣きを頂く事が出来るは、實に聖人の仰せにもある如く、値ひ難くして今遇ふことを得、聞き難くして已に聞くことを得たり。

一通りのことでは無い。又覺如上人は『式文』の初めに弟子四禪の線の端に、たま／＼南浮人身の針を貫き、曠海の浪の上に、希に西土佛教の杓に遇へり。と仰せられて、實に値ひ難く得難き、一通りならぬ御法に遇ひ、殊に今日聖人の六百五十年の御正忌に遇はせて貰ふことは、實に有難き極みであります。

就きまして今日の題は『親鸞聖人の德音』として置きました。之は御存知の如く同じく『式文』の中に哀れなるかなや、恩顔は寂滅の煙に化したまふと雖、眞影を眼前に留め、德音は無常の風に隔ると雖、實語を耳の底に貽す。

とお喜びなされ、夫れを又蓮如上人は『御文』の中に

夫、聖人御入滅は、すでに一百餘歳をふといへども、かたじけなくも目前に眞影を拜したてまつる。又德音は、はるかに無常の風にへだつといへども、まのあたり、實語を相承血脈して、あきらかに耳のそこにのこして、一流の他力眞實の信心、いまにたえせざるものなり。

と『式文』其儘を明示しなされてある。其處で今日は特に『親鸞聖人の德音』として、聖人直々／＼の御言葉を頂き度いと此の題を選んだのであります。

『教行信證』初め、聖人の御教化は澤山ありますけれども、去りながらいつも私の『歎異鈔』を頂く度に思ふのは、聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述べさふらひしことを云ふ。

此の一句が親鸞聖人口を開けば常に之を仰せられたから、斯くあるのて無いかと思ふのであります。凡て人には、其人其人の常に繰り反す言葉といふものがある。蓮如上人の『御文』を頂けば、何處にも殆んど決まつてあるお言葉がある。曰く、「南無といふは、衆生の阿彌陀佛後生助け給へと、頼みまふす意である。又阿彌陀佛といふは、其の頼む衆生を知り召して、其の御身より八萬四千の大光明を放ちて、其の者を攝取して捨て給はぬお意である。」と、之が蓮如上人のきまつて有る常の御教化である。八十通の『御文』どれを頂いても、皆な此の

お言葉がある。其の如く、親鸞聖人御在世の當時、殊に關東で言へば稻田に於て、又京都としては、態々十餘箇國の境を越えて來た人達に對して、聖人の常に仰せられたお言葉、所謂世間でいふ口辭に仰せられたお言葉が「聖人の常の仰せには、彌陀の五劫思惟の願を、……かたじけなさよと、御述べ候ひしことを」と即ち是れあなたの御述べたお言葉である。思ふに數年前物故せられた播州の後藤祐護師は念佛のあい間、に思ひ出したやうに「あゝ自分は惡僧ぢや、大惡僧でムります」といふ言葉を、常に口辭のやうに獨言に言はれた。此の方は一日に六萬邊も念佛を稱へられた難有き御方であつたが、其の念佛の間々に「あゝ愚僧は大惡僧でムります」と、思はず口を迸り出る、之れが述べた言葉である。もとより他の御教化として、外に變りやうは無けれども、殊に此のお言葉が聖人の常の仰せとあり、口を開けば此の御一句を常に仰せられた如く頂かれて、實に此の一句は如何程頂きても頂き切れぬ有難きお言葉であります。

之は餘りに言ひ過ぎになるかも知れませぬけれど、殊に『歎異鈔』の有難いのは、いつも親鸞々々と御自分の名を出してお示し下さることが多い事である。『教行信證』信卷の中に

悲しい哉、愚禿、愛慾の廣海に沈没し、各利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づ可し、傷む可し。

といふ御言葉もあり、又御消息等にも御名を挙げさせられてのお示しも随分あるけれども、殊に『歎異鈔』には夫れが著し

く、いつもあなたの御自督にかけ、あなたが直き／＼のお言葉として出てある所が多いのである。例へば、

親鸞にまきてはた念佛して彌陀に助けられ云云(第二章)

親鸞は父母孝養のためとて念佛一遍にても云云(第五章)

親鸞は弟子一人もたずさふらふ云云(第六章)

親鸞もこの不審ありつるに、唯圓房おなじこゝろにて云云

(第九章)

斯くの如く、こゝを頂いても、聖人が直き／＼現はれて、お示し下さる様が見えるのである。殊に最後の今の御述懐のお言葉の如き、勿論之は今より想像し奉るのであるけれども、聖人が一人在らせられる時でも、又人にお話あらせられる時でも、感極まりて、あゝ彌陀の五劫思惟の願は親鸞一人が爲めぢや、あゝ此の親鸞は實に悪人ぢや、愛慾の廣海に迷ふて仕て見やうなき大悪人ぢや、此の仕様の無き親鸞の身を、助けんと思召し立ち下された本願の忝けなさ」と、あなたが常に思ひ出しては喜びの様が實に此の一語で頂けるのである。

て親鸞聖人御一代の御苦勞と思ふと、此の一語が御一代の何處へも響き來るのである。聖人が流罪にお遇ひなされて、一人越後にお出なされ、非常な難路を踏みて御化導下さる時も、聖人の心中は常に「彌陀の五劫思惟の願を案ずれば……かたじけなさ」と、聖人の心中は常に之れ計りである。殊に日野左工門の門前で雪中一夜の御苦勞の時も、聖人の御述懐は他の事は仰しやらぬ。矢張り之に就けても「彌陀の五劫思惟の願を案ずれば……かたじけなさ」と、聖人の御一代

は全く此の一語を以て一貫してゐるのである。して見れば、聖人九十年の御苦勞は、全く此の彌陀の五劫思惟の御苦勞を御喜びなされる餘りより現はれ來つたのであつて、謂ひ換へれば親鸞聖人御一代の御苦勞は即ち彌陀の五劫思惟の御苦勞が、直き／＼此世に現はれ下されたものである、斯くあなたが御一代の間、彌陀の五劫思惟の御苦勞が有難いと、喜んで御示し下された御言葉が、之であります。

其處で『式文』初めの御言葉には、

爰に祖師聖人の化導に依て、法藏因位の本誓を聴く。歡喜胸に滿ち渴仰肝に銘す。云云

此の言葉が今の「彌陀の五劫思惟……かたじけなさ」との御意である。爰に上人が親鸞聖人の此のお言葉を頂いて、之を其の儘直ぐ『式文』の上に「爰に祖師聖人の化導に依て、法藏因位の本誓を聴く云云」と。是れ實に親鸞聖人の御化導の賜であります。

話が色々になりますけれども、聖人の御化導に何れおろかは無けれども、殊に『正信偈』は佛恩の深遠なるを信知して作るとお示しあるのであるが、其の『正信偈』も巻を開くと直ぐに、

無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在して、諸佛淨土の因、國土人天の善惡を都見して、無上殊勝の願を建立し、希有大弘誓を超發せり。五劫に之を思惟攝受したまふ。重ねて誓ふらば、名聲十方に聞えん。云々。

と、矢張り法藏菩薩の五劫の御苦勞から初めなされてある

のである。又『歎異鈔』には今の聖人御述懐のお言葉に續けて、

さればかたじけなくもわが御身にひきかけて我等が身の罪惡の深きほどをもしらず如來の御恩のかたきことをもしらずして迷へるを思ひしらせむんがために候ひけり云々

親鸞聖人が自分はそばくの業を持つて居る者である、此の業を持つ親鸞の身を助けて下さるは親鸞が此仕様の無き罪業である、此親鸞の身を助けて下さるは親鸞が此仕様の無き罪業深重の者なればこそ此の者を助けるとの廣大本願であるとお喜びなされる、其喜びは親鸞聖人御一人の爲めの喜びであるけれども實は十方衆生皆な同様の喜びなのである。同様の喜びであるけれども今親鸞聖人が自分は罪が深い彌陀の五劫思惟の願は實に此の仕様の無き親鸞一人の爲めぢやとお喜び下さるは、即ち我々自分の身の惡も思はず如來の御恩の高き事も知らずして迷ひ苦しめる者に、其の此方が罪の深い爲めに長々苦勞して居て下さる親様のある事を自身に頂きて我々に知らせて下さる事になるのである。其處を覺如上人は『式文』に

「爰に祖師聖人の化導に依りて、法藏因位の本誓を聴く云云」とお示し下されたのである。又蓮如上人『八箇條の御文』には

かるがゆへに、彌陀佛のむかし、法藏比丘たりしとき、衆生佛にならずばわれも正覺ならじと、ちかひましますとき、その正覺すでに成じたまひしすがたこそいまの南無阿彌陀佛なりとこゝろうべし。云云

斯く彌陀の五劫思惟、法藏菩薩の因位の御苦勞といふ、茲が他力眞宗の眞宗たる難有き所であります。

處が之は少々口にするも勿體無い話であるけれども、信仰

に氣の附かぬ間は、此の法藏菩薩の因位といふ點が、最も分り難いのである。盡十方無碍の光明、無邊の廣大の恵みと聞くとまだ分かるも、法藏菩薩の御本願、五劫永劫の御苦勞と聞くと、最も頂き難いのである。處が初め眞宗の法を聴くに、一番分からぬ無理屈の處が、彌々分つて見ると、一番難有き尊き處なる事に氣を附けねばならぬのである。初め六かしくて分からぬ處が、彌々頂けて見ると一番難有き味ひのある處、親鸞聖人の御言葉が殊に然うなのである。親鸞聖人の仰せて、無理屈をかしい思ふやうな處が、彌々頂いて見ると其處が實に深い／＼あなたの思召のある所、一寸無理屈で分からぬと思ふやうな處が、殊に深き意味合ひのある處なのである。殊に我々のこぼはる點は、法藏菩薩が本願を建て、五劫に思惟し永劫に修行して我々を待つて居て下さるといふ此の點、是れ實に眞宗の賜にして、而も最も頂けぬのである。

其處で吳々も詮索的考へや、無理屈分別では分らぬ。全體阿彌陀佛が我々を助けると盡十方無碍光如來と現はれて下された其の大もどが、我々の力に分る可き筈が無いのである。我々が生れし以來、親が私の爲めに心配し苦勞して下された、其の御苦勞は我々掌に見る如く分らぬも、其の親の心盡しを頂くは、あゝ夫程迄に親は此の者を思召し下されたのかと、其の親の親心を頂く一點で頂ける。茲さへ頂けば、さて今日迄長々迷ひに迷ひ、極はなく仕て見やう無き此の者を、眞に哀れみ見捨てぬ爲めに、親は夫れ程長い間待つて居て下されたのかと、其の遣る瀬無き親心を喜ぶ外、何も無くなつて

仕舞ふのである。今此の親様が我々衆生を哀れみ長々苦勞して待つて居て下さるのである。我々は人生の事考へると右にも左にも實に頼りが無い。一寸夜の寢醒めに思ひ出して、我々今は斯うやつて居るのであるが末は何うなるか、世は夢の如く實にたより無い。況んや親に別れ子を失ふた時は、殊に一人人生の味氣なき事を感じるのである。況んや人生の上を考へると世は争ひ、衝突、矛盾、眞に苦惱の世界悲しみの世界である。然るに茲に不思議にも、彌陀佛の本願が居て下さる。何うかと言ふに、斯く生の從來する所も知らず、死の趣向する所も知らぬ私、先きも知らず、後も分らぬけれども、現在斯く事實に苦しんで居る私、其の苦しみの私を遣る瀬無く思召し下さて、其の者を見捨てぬ、其の苦しんで居る夫れが可愛相である、其の爲めに其の者の光となり、救ひとなる爲めに態々苦勞して現はれて來て下された本願の親の彌陀佛なのである。て頂くは何處を頂くのであるか。此の淺間しきを見捨てず、助け救はねばならぬとの遣る瀬無き親心より、態々苦勞して、我々を救ひの爲めに現はれた佛が彌陀佛であるといふ、茲一つを頂かせ貰ふのである。

全體眞宗の教で、際立ちて難有いのは何處かといふに、彌陀佛とは救ひの佛でましますといふ茲の所である。即ち彌陀佛とは、我々を救ふ爲めに現はれた救ひのみ姿なのである。此の外に彌陀佛を言うて見やうは無い。衆生が苦むから夫れが可哀相であると、夫れを救ひの爲めに彌陀佛と姿が現はれて下されたのである。

大分今日は遠慮無く申すやうでありますけれども、一つ

其の苦しむ様を見て、自力では逆も行かぬ故、之を解脱せしめ其の苦惱より脱がれしめる爲めに、態々現はれた下された廣大の彌陀佛なのである。すると問題は、我々此の人生の日夜の實際の苦惱に在る、其の様を御覽下されて、其の自分て解脱出來ぬを悲しみ思召され、其の者を解脱せしめ救ひ上げる爲めに態々現はれた佛、其の遣る瀬無き親心より、五劫永劫の修行となりて現はれた佛故、實に彌陀佛は救ひの爲めの佛なのである。て五劫の思惟、永劫の修行と説くのも、皆な此方の淺間しき心に、此の遣る瀬無き親心届けて我々を解脱せしめ救ひ上げる爲め、此方の心の淺間しきが一通りて無い故、其の一通りならぬ者を救ひ上げる爲めに現はれた下された教なのである。是れ實に法藏菩薩の本願、五劫永劫の御苦勞、十劫正覺の姿、又今現に稱へさせて貰うて居る南無彌陀佛の御呼聲なのである。故に蓮如上人は先程も申す如く『御文』に「彌陀佛のむかし法藏比丘たりしとき、衆生佛にならずば、われも正覺ならじとちかひましますとき、その正覺すてに成じたまひしがたこそ、いまの南無彌陀佛なりとこゝろうべし。これすなはちわれらが往生のさだまりたる證據なり。云々。彌陀佛と申すも、此の廣大の心心の外にないのであります。

さて、して見ると他の事は何も入らぬ。我々生死の海三毒の毒に惱み苦しんで居る。其の惱み苦しむ者を何うかして助け度い、其の者を解脱せしめ度い、との遣る瀬無き心から、長々苦勞して現はれて下されたが、彌陀佛、其の遣る瀬無きあなたの心心が、佛の本願である。此の本願一つが大切な

申すならば、佛敎と基督教其他の敎と比べて、之は信仰前の事でありまされども私は斯ういふ風に考へて居た。基督教に世界が何う斯うなといふ事あるけれども、佛敎では苦を解脱すると説く。他敎には世界支配などいふ事があるけれども、我が佛敎ではそんな事が無く、純ら解脱の敎である處が有難い。世界が何う斯うなど無い處が有難い、と斯ういふ風に思つて居た。處が段々信仰に進み、殊に他力門の味ひが幾らか分つて來ると、我を救ふ所の恵みなり、佛なりといふことになる。すると今度は一層の事、救ひの佛なり神なりとある丈けの方が難有い、法藏菩薩の因位などいふ事があるよりも、天地は神が造りて神が我等を救ふ、とある方が分り易いといふ風の考へを動もすれば思つた事があつたのである。之れは動もすると能く人の持つ考へて、現に此間も或る西洋より歸られた方が、恵みなり慈悲なりとある丈けなれば分るけれども、本願に困る、といふことを言はれた。成る程最もであるけれども、有難いのは何處にあるか。其の最も分らぬ所が一番有難い處である事に氣を附けねばならぬのである。

さて夫れは何うかといふに、初めは佛敎は解脱の敎である所が有難いと思ふのであるけれども、彌陀佛の信仰となると、今度は自分が救はれる問題である故、今度は唯恵み、救ひとある丈けの方がなと思ふのであるが、其の我々の出離解脱といふ事に就き、其の實際に我々が解脱を得るといふ問題に就き、其の解脱を得せしめる爲めに態々現はれた佛が他力の彌陀佛であるからである。寧ろ世人は基督教の世界支配などいふ事よりも、實際只今の苦惱に泣いて居る。

である。此本願が無くては我々に聞えて下さらぬ、此の本願が無くては、佛の慈悲は徹して下さらぬ。先きに申す如く『正信偈』を頂くと、「無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在りまして、無上殊勝の願を建立したまへり。云々」處が親鸞聖人は此の建立の字の御左訓を「ハジメテナス」とつけ給ひてある。建立は普通に言へばたててある事である。夫れを親鸞聖人は態々「ハジメル」と讀ませ給ひてあるのである。又聖人には次の如き言葉もある。

無上佛とまふすは、かたちもありません。かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とは申さず、かたちましますやうをしらせんとて、はじめて彌陀佛とはまふすぞとまふすならひてさふらふ。(末燈鈔)

此のはじめてとある處が、實に有難いのである。我々を救ひ度いのお心より、はじめて現はれた下された彌陀佛の姿、彌陀佛の本願なのである。て譬えて言へば、彌陀佛の親心の槍の先きの、極の切先きは何であるか。佛が我々の苦しむ様を見せなして、廣大の本願を起し、盡十方無碍光如來と姿を現はして、我々の上に遣る瀬無き親心を加へて下さる、其の遣る瀬無き親心のそも、のほはじめ、大もとが我々に届いて下さる切先きなのである。佛は慈悲の方故、昔から我々を哀れんで居て下さるから有難いでは、佛が本願を建て下された初めが頂かれぬ。『行卷』の中には、聞くと云ふは、衆生佛願の生起本末を聞きて、疑心あるこ

と無し。之を聞くといふ。

と。即ち衆生佛願の生起本末を聞かせて貰ふのである。生起本末とは、即ち法藏菩薩の願を建て下された初め大もとである。此のものが肝腎なのである。何故かと言ふに、他に目當がありて建て下された本願では無い、此の親は汝等衆生が惡が止まぬ夫れが可哀相で起す慈悲故、先づ汝等自分の心を省みよ。其の悪い事の止まぬ、苦しみの離れぬ其の汝の心が、佛願の生起本末なるぞ、夫れが吾が苦勞の大もととなるぞ、とあるのである。其處でこそ親鸞聖人は「彌陀の五劫思惟の願を案ずるに、ひとへに親鸞聖人が爲めなりけり。さればそこばくの業を云々」との喜びが出て來たのである。五劫思惟を遠い昔の事のやうに思ふて居ては、大きに間違ふ。我々が心中に、日夜止まずに起る悪い心、之が佛を泣かしめ奉つた大もとなのである。之が佛をして態々一如法界の都より法藏菩薩と現はれしめ奉り、此の悪い心が長々御苦勞御心配をさせ奉つたのである。實に私の心の淺間しさが、佛の本願の大もと、といふ事になるのであります。

三

さて、斯く言へば易き事のやうなれども、之が中々易くはないのである。入らざる比較をするでは無けれども、同じ法然聖人の御教化を聴聞なされたお弟子は澤山あつたけれども、茲を指示し下されたは、親鸞聖人御一人なのである。法然聖人『選擇集』のお言葉に、

然れば則ち彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催ふされ、

のものと生命に歸るのであると言ふ時は、我々はもととは佛なりしも迷ひの爲め三界に流轉して居たのであるが、夫れが、今もとに歸るといふ事になり、樂になり浮いて仕舞つて駄目である。而して斯く言ひて眞に心が樂になり安心が得られるかといふに、ちつとも樂にならぬ。矢張り我が身の淺間しき事が氣にかゝる。其處で此の度びは何うしても淺間しき心が止まぬ、有難くならぬ、もつと眞面目になれそうなのである、何うも私共お慈悲を頂いても、日常生活の上に惡を思ふ、つく／＼人生の悲哀を感じる、などいふやうな事を言ふ。一應大變よいやうであるけれども、斯くなると益々自分が惡しくて仕様が無いやうになつて仕舞ふ。之は即ち歸命を命を捨てると讀む方の側で、眞面目は實に眞面目なるも、斯うなると鎮西上人流の御安心となり、死ぬ迄念佛稱へ詰めにして、眞面目に仕て居なければならぬ事となる。其の態度の殊勝なる事に於ては、實に尊い限りであるけれども、之れでは矢張りいつ迄も心に心淋しい處が離れぬ。

處で親鸞聖人は如何に指示し下さるかと言ふに、十劫正覺の佛が出来上つて下された時に、既に我々は光明中の身として頂いて居るのであると言ふは、横着に頂いて居るのである。夫れならばとて、之からすがり頼み求むるのであると言ふは、親の遣る瀬無き親心が未だ頂けず、親に對して隔て心を以て向つて居るのである。然らば何うかと言ふに、成程十劫正覺の昔より佛が待ち受けて居て下さるは、我々罪惡の者が助からぬ故、夫れを助け度いの御一心より、十劫以來佛となりて現はれて居て下さるので、親は是れ程に思ふぞよと、あなた

普く一切を攝せんが爲に、造像起塔等の諸行を以て、往生の本願と爲さず、唯稱名念佛の一行を以て其の本願と爲る也。

「彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催ふされ」茲である、茲が本願の初め、生命なのである。茲を頂かぬと、我々お慈悲を頂くに、或は横着になり、遠慮に流れ、浮いたり沈んだり仕て仕舞ふのである。我々お慈悲の頂けぬは實に茲一個所が頂けぬからである。同じ事が西山上人にすると、常に言ふ法然聖人より親鸞聖人に御附屬なされた善導大師の御文「若し我成佛せんに、十方の衆生我が名號を稱して、下十聲に至らん、若し生れずは正覺を取らず。彼の佛今現在に成佛したまへり。當さに知るべし、本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得。」

此の文を讀んで、して見れば我々は助かる事にも、決つてある、佛十劫の昔に若し生れずば正覺を取らぬとお誓ひ下された、其の正覺既に御成就なつてあるのだから、我々の往生は其の時にもう決まつてある、心配は入らぬと。斯くなるのかぬのである。すると昔から能く間違ふ如く、本願の出來た時に我々を助くる親は出來上つて下されてあるのだから、我々は既に助かつて居るのである、夫れを今迄知らなんだのである、といふ事になる。之れでは佛の遣る瀬無き心は一寸も頂けて居ぬ。親は自分に物を下さるから有難いと喜ぶ喜びでは實はまだ親に夫れ程心配かけた我が身の淺間しさが、ちつとも分かつて居ぬのである。

其處で、歸命の命の字を十劫正覺のいのちと讀み、我々其

の遣る瀬無き親心は、十劫正覺の曉天より、今日今時に至る迄、念々切々、足を瓜立て聲を枯らして待つて居て下さるのである。然しながら佛が是れ程お思ひ下されてあつても、其の遣る瀬無き親心が衆生に届いて下さる時は、何にもならぬ。即ち先きの文に「若し我れ佛を成らんに、十方の衆生我が名號を稱へて」とあるは、即ち之を衆生に届けねばならぬから、あるのである。又『和讃』に

十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし、

攝取してすてざれば、阿彌陀となづけけたてまつる。

十方微塵世界の罪惡の衆生とあつてもよさうな、特に念佛の衆生とあるが矢張り之である。此の遣る瀬無き親心が彌々衆生、の心に届いて下された一念が、即ち念佛の衆生、此の、我が此の親心を届けてとある茲が實に有難い處なのである。そんならとて、然らば之より一心にならんならぬと思ふは駄目、此方が其の一心になれる位なら、佛此の親心を知らせるとは仰しやらぬ。其の一心になれぬ其の者を、其の心の淺間しい其處が可哀相である、常に言ふ病氣や不具の子供の如く其の善くなれぬ其處が可哀相である、一其の如き者を助け救ふ爲め我は現はれたのであるから、何うか此の親心を聞き安んじて呉れと、遣る瀬無き思ひにて、常に我々に向つて、下さるのである。

そこで親鸞聖人の歸命は、正覺の命にもあらず、捨てる命にも非ず、何うかと言ふに、『行卷』に

歸命といふは本願招換の勅命なり。發願廻向といふは、如來すでに發願して、衆生の行を廻施したまふの心なり云々。

即ち親鸞聖人は歸命は、佛が衆生の其の罪深き者を助け救ふ爲めに來たのであるから、夫れを心配するな、斯く親が待ち兼ねて居るぞ、此の親心を聞けよと、佛よりして呼びかけて下さる、其の遣る瀨無き佛よりの勅命であると御示し下さるのである。若し人格的といふ事を言ふならば、之を實に人格的の御呼聲、我々罪惡の者が此の度び助かるは、實に此の御呼聲一つて助けて貰はれるのである。遣る瀨無き親様が、此方の淺間しき心の底の底迄知り抜いて、其の淺間しき心がちつとして見て居られぬで無いか、と

待ちかねて恨むとつげよ皆なひとに

いつをいつとていそがざるらん。

其の遣る瀨無き心より種々に應化身を現はして御苦勞下さる、其の親様の遣る瀨無き御勅命が即ち歸命。て親鸞聖人は「歸命」といふは本願招換の勅命也。發願廻向といふは如來既に發願して、衆生の行を廻したまふの心なり云々。「是れ即ち法藏因位の本誓であり、是れ即ち阿彌陀佛の廣大の親心である。覺如上人が「爰に祖師聖人の化導に依つて、法藏因位の本誓をさく」と言はれたるも、此の呼聲一つであります。

今日子供が亡くなつて人生が思ふやうにならぬ、又病氣の爲めに人生が思ふやうにならぬと、歎いて居られる方がある。實に尤もであるが、如何にしても人生は、冷やかなる生死の海、無常の世界である。此の生死無常の人生に於て、眞に其の者を遣る瀨無き思召し下さる親様が御出下されて、汝を待ち兼ねるぞとの廣大の親心である。其の親心を何て我々の心に貫き届けて下さるかと言ふは、南無阿彌陀佛は其の親様の

一念である。其の一念に

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まふさんとおもひたつ心のおこるとき、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

此の一念に漕ぎ着ける爲めに親は長々御苦勞して下されてあつたのである。親は子供を育て、色々學問させて、而して一代何處で満足するかと云ふに、子供の成功を以て満足するもので無い。あゝ親は私の爲め、斯く迄御苦勞下されてあつたのであるか、有難いと、子供に親の親心が眞に貫徹した、其の一聲聞く時に、初めて眞の満足をして下さるのである。今大悲の親様は、「十方微塵世界の、念佛の衆生を見そなはし、攝取してすてざれば、又念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、攝取不捨の利益にはあづけし給ふなり」——今日迄此の廣大な心頂かずに、浮か／＼暮して居たが、あゝ斯く迄此の仕て見様なき私を助ける爲めに長々御苦勞下され、待ち兼ねて居て下されたお慈悲であつたかと初めて氣が附いた時は、思はず知らず念佛稱へずには居られぬ。彼の數年前物故せられた福間氏が『獲信の記』には、

予は期せずして自然の中に念佛を稱したり。

とある。今迄念佛など少しも知ら無かつた人が、氣の附いた一念には、思はず知らず、南無阿彌陀佛と口を衝いて念佛が浮んで下さるのである。此の一念が即ち「十方微塵世界の念佛の衆生」として頂いた一念である。段々頂き来れば、茲はどうしても念佛の衆生となかねばならぬ所、實に有難き極みであります。

名前である。名前のみならず名義相應して、其の南無阿彌陀佛の中に、今言ふ遣る瀨無き佛のお心を残らず籠めさせられてあるのである。南無阿彌陀佛の六字は、實に唯の六字に非ず、斯く長々の御苦勞で現はれ下されたる佛全體のお心が皆な籠つて、下さるのである。『正信偈』の中には、

……重ねて誓ふらくば名聲十方に聞えん。普く無量、無邊光、無碍、無對先、炎王、清淨、歡喜、智慧光、不斷、難思、無稱光、超日月光を放ちて塵刹を照らす。一切の群生光照を蒙る。

昨夜もふと思ふたのでありますが、「十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし」と謂ひ、又茲には「塵刹を照らす」など、平素はうつかり思うて居るのであるが實に廣大な思うても見やうの無い廣い世界をお照し下さるのである。其の廣大なるお心其の儘を南無阿彌陀佛の六字にして、之を以て呼びかけ下さる、實に廣大な親の光明廣大な南無阿彌陀佛の御呼聲である。て又『正信偈』の中には、

定散と逆惡を捨棄して、光明名號因縁を顯はす。云々

又

本願の名號は正定の業なり。至心信樂の願を因と爲す。

實に此の仕様の無い私を助ける爲めに、此の廣大なる光明名號の因縁を以て、お照らし下され、私の心に其の遣る瀨無き親心を届けて下さる。而して此の因縁に照らされて、彌々あなた其の遣る瀨無きお心が届いて下された時が「至心信樂已を忘れて、速に無行不成の願海に歸す」、式文である。此の「至心信樂已を忘れて」とある所が、實に親心の貫徹して下さる

猶ほ之につき近頃私は、『御文』の御教化の如何にも有難い事をしみ／＼と味はせて貰ひ、喜ばせて貰うて居る。誰でも『御文』で困るのは、南無といふは阿彌陀佛後生助け給へと頼む意であるとの御教化である。之が餘りに多いので、之が邪魔になりて皆んなが困るのである。處が此の邪魔になる處が、一番肝心の處、いつても邪魔になる處が、最も有難い處である事を思はねばならぬのである。何うかと言ふに、南無の二字は今言ふ親心の此方に届いて下された一念故、即ち阿彌陀佛後生助け給へになるのである。南無の二字の味ひは、實に茲にあるのである。『御一代開書』の中には、

のたまはく、南無の字は聖人の御流義にかぎりて、あそびしけり。南無阿彌陀佛を泥にてうつさせられて、御座敷にかけさせられて、仰せられけるは、不可思議光佛、無碍光佛も、この南無阿彌陀佛をほめたまふ徳號なり。しかれば

南無阿彌陀佛と佛のお姿の上に、南無の後生助け給へと頼むの二字の附いてあるは、阿彌陀佛を南無と此方から拜むやうに附いてあるのでは無い、佛はあなたの遣る瀨無きお心が此方の心に届く迄は満足に思召さぬ。即ち南無とは先き程より段々に言ふ如く、此の親心を知らさずには措かぬとある、あなた其の勅命が、彌々私の心に届いて下された一念の時である。故に其の一念が即ち後生助け給へと頼む頂き心地となるのである。

今年の夏であつたか、安藝の祇園の西本といふ方の處に泊つた時に、其の夜法話會が初まつた。其の時其のお宅の方が

「十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし」とある、此の念佛の衆生が邪魔になつて困ると言はれる。私は夫れならば罪惡の衆生とあるとあなたの心にはよいのかとお尋ねすると、然うだと言はれる。そこで私は例の姨捨山のお話して、親は我々が悪いことしてもよいと言つて下さるでは眞に安心は出来ぬが、彌々親を捨て、歸らうとする時に、我は實に汝の將來を案じる、我は此の儘死するとも汝、とを必ずよくせよ、汝が道に迷はうかと思つて、道すがら汝の爲めに道しるべを仕て置いてやつた程に、之を辿つて間違へぬやう歸れと言はれる、之れが實に親様の御親心、勅命である。此の親心御呼聲と頂いて見れば、悪くてもよいと言つて下さるのであるなど、横着な事言つては居られぬ。あゝ知らずに居たが、此の親捨ての不孝者の爲めに、親は夫程苦勞して下されたのであるか、申譯が無いと廻心懺悔する。之れが即ち届いて下された一念である。此の一念に思はず南無阿彌陀佛と念佛が浮んで下さる。之れが念佛の衆生である。念佛の衆生とは、此の確に親心の届いて下された處である。此の廣大の信心が彌々眞に心中に徹して下された時は、是非とも念佛の衆生とあらねばならぬのであると、お話し來た事でありましたが、南無の後生助け給へも、又實に茲である。南無は即ち親様の御道しるべである。此の私の爲めに、飽く迄届けねばあかぬとあるあなたの遺る瀬無き御親心、勅命である。此の遺る瀬無き御親心、勅命故、私の心に届かずには居て下されぬ。其の彌々届いて下されて、南無と頂いた時が後生助け給へと頼む信の一念であります。

り實話を顯かに聴聞の出来る事、全く如信上人、覺如上人を初め、次第相承の善智識の御恩であります。

猶ほ此の間南條先生の御講演で承はつたのでありますが、『御傳鈔』に

聖人弘長二歲壬戌仲冬下旬の候より、いさゝか不例の氣まします。云々

仲冬下旬の候より御不例とあれば、何となく丁度二十一日よりの御正忌七晝夜が、聖人御病中に當つて居るので無いかと思はれて嚴そかに感ずる次第であります。『御臨末の御書』には宜はく

我歳きはまりて安養淨土に還歸すといへども、和歌の浦の片雄浪の、よせかけ／＼歸らんに同じ。一人居て喜ばゞ二人と思ふべし、二人居て喜ばゞ三人と思ふべし。その一人は親戀なり。

我れなくと法は盡きまじ和歌の浦

あをくさ人のあらんかぎりは。

又『歎徳文』には

然れば則ち蓮華藏界の中にして、今の講肆を照見し、檀林資座の上より、斯の梵筵に影向したまふらん。云々。

南無阿彌陀佛々々々々

(十一月二十六日)

さて此の頂く一念に、親様は大満足して下され、あ々々々苦勞したは茲一つを汝に届け度い爲めてあつたと、其の一念に光明中に攝め取つて、攝取不捨の身として下さる。即ち『御文』に其の頼む意をよく知し召して、八萬四千の大明明を放ちて、其者を攝取して捨て給はぬが、阿彌陀佛の四字の意である、と明示下さるが茲である。又釋尊は此の者を是れ我が善き親友なりとお呼び下され、又『觀經』には、人中の芬陀利華である、と讃め下さる。『和讃』には、

他力の信心うるひとを うやまひ、おほきによりこへは、すなはちわが親友ぞと 教主釋尊はほめたまふ

釋尊は初めから誰でも、親友と仰しやるのでは無い。他力の信心を得て、敬ひ大に慶ぶ者を、親友ぞと言つて下さるのである。又親戀聖人は斯く頂いた者こそ、眞の佛弟子である、吾が御同朋、御同行であると、仰せ下さる。實に有難き極みであります。

而して斯くの如き、遺る瀬無き大悲の親心をお聞かせ下されたは、ひとへに親戀一人が爲めなりけりと、九十年の御一生、御流罪の時も關東御化導の時も、之を喜ぶまに／＼御苦勞下されたが、親戀聖人の御一代である。さりながら、『式文』の中には

方今念佛の要義まち／＼なりと雖も、他力眞宗の興行は即ち今師の智識より起り、専修正行の繁昌は遺弟の念力より成ず。云云。

之て頂くと、御入滅當時も随分色々になつてあつたものと思はれる。然るに何の幸か、我々六百五十年後の今日、面の當

告白

他力の悲願はかくの如き の我等がためなりけり

加藤竹三郎

過日は恩師の御前清き道場にて告白遊ばされ候由、唯々いとも／＼感謝の御稱名より外無候。就ては只今近角先生より御前様に是非告白をかいて求道にかゝげよとの仰せ、來月三日迄に書いて求道學舎へ御届被下度取急ぎ申上候。

一月卅日夜

生沼さく子

私は此の端書を手に致した時、一二ヶ月前の自分を憶い出して實に夢の様であります。煎豆に花とても申しまじよふか、唯々感謝の思に堪へません。私は未だ御正信偈の一卷さへ上げる事も出来ぬ誠に御恥かしい者で御座います。

而して今告白を書かせて頂きますのは、深き喜びの念にたへません。拙文をも省す茲に告白を認めました。皆様の御目に觸れますのを私は無上の仕合に存じます。

私は小供の折から御佛縁の深い者で、母に連れられ常に説教所へ詣りました者で御座います。幼な心に築地の本願寺が火

災に遇いました時、母に連れられて寒い日に焼跡へ煉瓦を片付に参つた事を子供心に覚えて居ります。その後十三歳の時商家へ奉公に参り、十四歳にして父と死別を致しました。私の奉公に参いつた先も、母が御法のある所を撰んで呉れたので、奉公中も常に説教を聴聞して居りましたが、其の當時は何の意味もなく伺つて居りました。すると十九歳の時に、墨丸結核と云ふ病に罹りまして、第二病院へ入院致しまして手術を受け、其の結果奉公も出来ず、遂に宅へ歸つて参り兄の厄介になり、廿五歳の時一の商店を持ちました。其後も度々御説教は伺つて居りました。或る時去る説教所で他力の信仰は悪人を的の御本願故、罪は如何程深く其佛様は御救ひ下さる、助けずには置かんの御本願なれば、其の御慈悲を素直に御請けが出来れば、その時が安心立命の時、煩惱は起るが起る度毎に、こんな者が御助けとは何んと深い佛様の御慈悲と喜び其の日々を御恩報謝に送るのだと伺ひました。然るに私には中々安心立命をして御報謝の日暮しが少しも出来ませず、又こんな自分の様な者でも救はるゝのか位に思つて居りました。斯の様な状態で御説教を聴聞して居りました。ある時殺生戒の御話を伺ひまして、自分は大邊鉤が好きで、自分に取つては唯一の娛樂であつたので、鉤が出来なければ人生の快樂の央は失ふ位に思ひました。そして私は足腰の立つ内は釣を樂んで、老年になつて説教を聴いて、其の時に御救に預かつたら大に都合の好い事だと思ひました。

二

術の後が痛みまして、非常の苦痛を覺へ今考へましてもゾツト致します。見舞の人の顔さへ見ますれば、唯々譯もなく涙が溢れます、心細い事斗り考へまして夜分ベッドに横はつて居りますと、平生は憶ひ出しもしない事などがさ／＼と浮びまして、殊に幼い昔の樂しかつた事が慕はしく戀しく、夫れからそれへと連想を致まして遂には心淋しくなつて仕舞ます。又時間さへ来れば来て居る人々にも別れねばならず、何んだかすべてが當にならない様にも念はれて、寂莫に更ける病室の夜は果敢ない人生觀を起しました。一ヶ月の後は必らず退院の出来る病氣ですらかゝる淋しき觀の生ずるに、死の運命に囚はれ病床に苦悶するに於ては何か便るべき者あらざれば、如何に人生の心細さを思ひて、此の度出院せば眞面目に宗教を聞かんものと思ひました。圖らずその時姪の生沼が鎌倉に居りました頃で、近頃近角先生の御講話を伺ひ佛様の御慈悲を喜んで居るとの事を耳に致して居りましたもの故、夫れを憶ひ出し今度退院なさば、是非眞面目に宗教を聴いて見たいと云ふ書狀を出しました。すると長い返事が参りまして大邊私の體を心配し、且つ佛様の御慈悲に絶れ、退院なさば早速近角先生方へ伺へとあつた情の籠つた手紙を送つて呉れました。病床でその手紙は嬉しく見まして、又母の許迄送りまして。其内退院を致しまして湯河原へ参り四月五日歸京致しまして、九日の日曜日に初めて求道學舎で先生の御話を伺ひましたが分りませんでした。歸途生沼と同道して上野へ廻りました。その途々生沼から種々と佛様の御慈悲の御話を聞かされました其時に生沼が申したのは、私は不幸にも父に佛様

其の中に日露戦争が起りました。私は最も主戰論者でありまして、戰地へ出發せらるゝ兵士の方を新橋へ夜毎見送つて、自分では大に志氣を鼓舞して居つた積りで居りました。或る雪の降る夜戰地へ出發する兵士の方と、徴發された馬に別れた人の話を聞き、なんとなく、戦争は悲惨なものだと思ひました。すると知人に社會主義を主張する人がありまして、戦争は非常の罪惡で人道に反する事だ、人生の悲惨の極だと聞かされ、又労働問題の話など説かれまして、遂に一端の社會主義者と化しました。

すると、今迄が御慈悲を前に申上た様に伺つて居りましたもの故、宗教は衣食住足りて居る一部の階級の者が味ふ丈けの物で、如何に擴大なる佛様の慈悲で有つても、饑たり凍へたりして居る社會の多數の者には宗教を聴くと云ふ余地を與へない、人類を救済するならば寧ろ社會主義を鼓吹した方が遙に近道で、社會主義が行はれれば随つて宗教も弘まる位に念ひ追々宗教とは遠ざかつて仕舞ひました。さりながら無我の愛と云ふ雜誌は、一種社會主義臭いのでそれだけは愛讀して居りました。

三

昨年の二月持病の痔疾が次第に重くなりまして、林病院へ入院して手術を受ける事となりましたが、以前二度も麻酔劑を嗅いで居りますので、今度の入院は實に嫌やてゝ、殆んど死地につく様な心持が致しましたが、思ひ切て入院を致しまして昨年の二月十三日に手術を受けました。一週間斗りは手

の御慈悲を聴かせる事も出来ずに亡くしたは、實に残念に思ふ、それ故せめてあなたには是非この御慈悲を頂いて置いて貰ひたい、自身は病身故どうぞ信仰に入つてくださいと、懇々と説かれました。又忌憚なく自分が昔し思つて居た事を自白し、私に懺悔して御慈悲を喜んで居られました。私はその時實に不思議にたへませんでした。實は生沼とは暫らく打たえて居りまして、久し振て過た私に此の様な事を云ふのは、何か深く信ずる物が無くては云へぬ事で、私は佛様は慥に此の世に在しますものかと其時に想ひました。その後近角先生は地方へ御出掛けなされて御不在の様に承りましたので暫らく伺ひませんでした。

四

其内に私に妻帯問題が見世へ来る一二の方から起つたのであります。所が私は前申上た通りの病氣に罹つた者故、自分では妻は持てないものと思つて居ました。すると、その方々が商店を經營して居ては、年寄の母丈けては家政の取締が骨が折れるし、又將來は非常に困る事も有るだらう、又萬事不自由だらう、幸ひ私の體も知つて居て適當の配偶者があるからとて、切に勧めて呉れます。私も左様な人があれば仕合だとその方の心切を喜び、母にも相談して妻帯なす事と致しまして、八月の三日に式を済ませその儘旅行を致したのであります。

すると、その旅行中に早や煩悶が起つたのであります。その譯は一寸具體的に申上げられませんが、私の心中には實に一

方ならぬ苦みが生じたのであります。歸京致して後、常に鬱々として物言ふさへも厭はしいと云ふ不快の日暮らしを致しました。それ故母も親類も友人も非常に心配を致して呉れまして、様々と私を説きますが、私はどうしても人の云ふ事が聞けません。遂には不心得にも自から家を去つて遠く走ろうと思ひました。左様な譯故妻とも合議の上一時別居する事と致しました。兎角する内媒介人から迎ひが来りましたから、行きますと、君は融通の利がない頭だから困る、夫なるものは一寸氣轉ものだ、甘く其場を切抜けなければ一家は圓滑には行かぬ、又君は年寄つた母の事も考へねばならぬと云はれました。又どうしても否なら其方法も講じるとも云つてくれました。然し私は母と云ふ一言を聞きまして、玆は如何な苦痛でも忍ばねばならぬ所かと思ひました。

されど自身に考へて見ますと、今迄私とても多少其の邊の消息を辨まへないでもありませんが、その辛抱はどうしても堪へる事が出来ませんでした、家を去らんとまで決心致したものが、さればとて翻然として心を取直す事が出来るものかと思つて見ますと、どうも出来さうありません。

サアこうなると右へも左りへも前へも後へも行けなくなりました。如何に考へて見まして一ツ事を繰返して居る斗りで、胸の苦痛は増々加はる斗りです。

此時に生沼の事を憶ひ出しまして、生沼に逢つて相談をなし、右と左とか極めて貰つたら少しは先の見へた返事をして呉れるだろうと、漸く媒介人の家を辭しました。九て天涯の孤客とても云ふ様な心持で。

五

藥研堀の姉の家へ兎も角参りました、これから生沼へ行くと思ひましたら、姉も同行すると云はれ一所に参りました。生沼へ参りまして一仕始終を打明け、右か左の所置を頼みました所、夫れは何んでも近角先生に御遇ひ申せば必ず解決がつくとの一體張で、何等迫りまして、今私の胸に悶へて居る大難問は一向右とも左とも云つて呉れません。

そこで私の申すには、先生が易者か占者であるならばすぐにも伺ひますが、先生に向つて斯様の愧かしい問題は申上られないと申したら、叔父の恥は自らの恥と同様だと申し、何でも伺へと申します。

さればとて私はどうしても先生の御宅へ伺ふ氣に成れませんが、何んとか口實を設けてこの場を逃げ様と斗り思つて居ました。すると生沼はどうしても放しません、仕舞には一所に行から一遍丈行てくれと頼みます。最う仕方がありませんからどうせ行ても解決のつかないに極つて居るが、一遍なら生沼の氣休めにも思ひまして承知致して、生沼方を出しましたが、何所へ行く所がありません故、市中を其夜彷徨しまして夜中の二時頃歸りました。すると姉から宵の中に電話で、明朝九時に先生が御會ひ下さるとの事故、その時刻に先生へ伺ふ様にと知らしてありました。私はハット思ひました。この様に早く先生が御會ひ下さるうとは思ひませんでした。實は先生の所へ行きたくないのです。最早致方がありません故、翌朝は車に乗つて先生方へ参りました。夫れは車に乗つて居れば否

應なしに先生の所へ連れて行かれるので、丁度入院でも致す様な心持でした。

伺ひますと先生はすぐ會つて下さいました。始終の事を先生に申上りましたら、先生は細々と佛様の御慈悲を御説き下されましたが、何を仰せられましたか一向に覺へて居りません、その内生沼が見えました。自分は先生に御目に懸つてもこの解釋が付かないものと自身に極めて居りますし、又一度先生へ伺へば生沼への言譯が濟む位に思つて居りますもの故、先生の御心切も耳に入りません。

それでも先生は熱心に御説き下さるのですが、夫れが反つて煩はしく、遂に勿體ない事ですが一刻も早く御暇申上げたくて堪へられませんか。先生が御忙がしいと云ふ事を承知致して居りますので、夫れを口實にして逃出する事斗り考へて居ました。その内一時近くなりましたもの故、無理に御暇を致して表へ出ました。生沼にすぐ別かれやうかと思ひましたが、生沼がなんとなく悲しい顔をして居りますので、生沼の家まで参りました。すると又生沼から燈火の付くまで攻められました。一遍ではいけない、これから度々先生の御講話を聴いて呉れと申します。實は私も今は絶體絶命であります。先生の所へ伺はないにしても此の解決は自分にも付く見があるが、ありません。何れにしても善いか自分も泣く斗りて、生沼も俱に泣いて居ります。私も遂に氣の毒になりまして、今朝家を出る時には先生に御目に掛つても無駄な事位に思つて居ました故、たとへ先生が如何程御話を下さつても分る譯はありません、この次ぎからはそんな心を持たずに御話を伺ひませうと申し

ましたら生沼も大邊喜んで呉れました。

其の後は日曜毎に求道學舎へ伺ひまして御講話を聴聞致して居りましたが、どうも自分の思ふ事斗り先に立つて、肝要の御慈悲の御話は少しも分りません。

信仰談話會の時などは信仰に入つた方が羨ましく、又或る時は信仰に入れば自分の否だといふ事、否でなくなるのかしら、左様なつては反つて尙苦痛だし、去ればとて又信仰にも入りたく否、御經の一二巻も讀んで居つたら信仰は早く得られるものかとも思ひ種々様々の事を考へまして、自分は絶對に信仰は得られないものと失望を致した事もあります。遂には殆んど自分でも五里霧中に居る様な心持で譯が分らなくなりました。

左右して慈悲宗教を聴いて尙煩悶を求めた様に思ひました。先生が常に佛様の御慈悲を親の慈悲と併せて御説きなされる事を伺つて居りまして、自分にもそんな親が有つたら信仰にも入られるものと思つた事も御座います。只今考へて見ますと實に慙愧の至りて有ります。

六

そんな状態で御講話の御席を汚して居ました。其内に昨年の報恩講の御座の時、先生が御開山様は小豆が御好きであつたと仰しやつて、あづき粥を御講話の後くださいました。先生初め皆々様と一味平等に御粥を頂きました。私は何んとか心が嬉しく、又佛様の御慈悲が難有いやうな心持が致しました。その事を生沼に逢ひました時申しました所、それはよい

事だから何んでも先生の御話をよく伺へと申されました、自分でも少し勇氣が出まして、其の次ぎの土曜日九段の佛教俱樂部にて、先生に佛様が難有いような心持がすると申上ました。

するとその座の御講話の中に、御慈悲が頂けもせぬ内に難有いやう心持がするなどと云ふのが間違つて居ると仰せられました。私は佛様が難有いやうに思はれましたから左様申上たに、夫れが間違つて居るなんて仰しやると心の中に妙に思ひました。又御講話が済みまして後、何か聞く事は無いかと仰せられます故、今度は佛様の御慈悲は餘りうますぎるものと思ひますと申上りましたら、先生はあなたは親の慈悲と云ふ事を知らずに、唯錢をくれ錢を呉れと云つて居る様な者だと仰せられました。私は錢を呉れと申しも仕ないのに先生はいやな御答をなさる方だと思ひました。

丁度此の日は姉も生沼も詣つて居りまして、歸り途に姉が私に申すには實にあの質問の時は、胸がヒヤ／＼したと云ひました。同道して宅へ歸つて來まして、その晩は十時頃迄姉に御慈悲の話を聞かされました。

その晩は枕に就きまして眠られませんでした。何んとなく不安の念が胸に往來して心が平かでありません。少しく出ました勇氣も沮喪致しまして、肌が寒いやうな氣持が致します。床の中で信仰の餘瀝を披見致して居りまして、附録讀經余瀝の南條笠原兩師が二十五年前に渡英し、彼地にて御苦勞なされた跡を先生が憶ふて、燈下に暗涙を拭ふたと云ふ所を拜見致して居り、思はす床の上に起上りました。さうして佛壇に向つて

どうぞ御慈悲を蒙らせて、頂きたいと一生懸命祈りました。夫れは私に舊教の信者の友人がありまして、私の近頃の煩悶を知つて居ります故、求め得られんと云ふ聖句があるから君は佛に祈れ／＼と申されますもの故、譯もなく祈つたのであります。その晩は御佛壇の扉を明けまして其の前に臥せりました。その翌朝(十二月三日)本郷の學舎に参りまして、私は先生のテンプルの前に近く座して聴聞致して居りました。

丁度御講話が初まつて居りまして、段々伺つて居ります内に、歎異鈔第九章目の「他力の悲願はかくのごときわれらがためなりけり」としうれて、い／＼たのもしくおぼゆるなり」と云ふ御言葉を先生が御述べになりました。何んと云ふ深い

われらがためなりけり
われらがためなりけり

こんな者のためて御座いましたか。私の爲でありましたか。ア、勿體ないと、御佛の遣る瀬なき慈悲の電火、今、時、到りて吾が胸に閃めきし瞬間の刹那、無量の涙瀧の如く流れ、先生の前も邊りの方々の前もなく泣き伏しました。その時の感想到底私の口や筆には何んと申してよいやら申上る事も書く事も出来ません。勿體ないやら嬉しいやら難有いやら。能くも／＼今迄御見捨のなき手強き御本願の忝なさ、生れて初めて心の底より感謝の御念佛を唱へ申しました。

南無阿彌陀佛……

尙其の時私は今迄思ひも付かぬ非常の大罪を犯して居つた事が胸に浮びました。夫れは母に不孝をして居つた事で、二

三年前かと思ひます、殆んど忘れて居りまして憶い出した事もありませんでした。母が私に向つて御前は不孝をしてよい、又何をしてよいから只説教を聴いてくれと云つた一言が胸に浮びました。噫何たる深い慈悲の言葉でせうか、不孝をしてよい何をしてよいと宥してくださるさへ、随分深い親の慈悲であるに、其上に説教を聴いて呉れとは何たる深い慈悲の親心でせう。實に私は親不孝の大惡人大罪人です。さうして今が今迄理想の親が有つたら信仰に入られる事もあらうと思つて居た事の怖ろしく、自分ながら驚き入りました。まだ／＼母親がせめて此世に在はすが何よりも嬉敷、萬一母が亡き人の數に入りて居りしならば何に向つてこの大罪の詫を致しようか。石塔を抱きて血の涙を滲ぎても既に取返しが付かぬ事とおもひ、嬉しいやら悲しいやら殆んど夢中に先生の御宅を出ました。表へは出ましたが歩行く事が出来ません。涙が留度なく出まして本郷の通りまでは何が何やら分りませんでした。すると私の肩を押へる方があります。不斗顔を上げますと、三須さんと仰しやる信者の方であります。悲しからう、察する、私も覺えがある、今が一番辛い時で、この薄帯一枚取れば電氣ついて明かるくなると云つて慰めてくださいます。私は三須さんに今思つて居る胸の中を打明けたいと思ひまして、近所のミルクホールへても同道してくださいませんかと申上りましたら、三須さんは自分の家へ來給へと云つてくれました。私は行きたくはありますが、生沼へ行つて一言今日の嬉しいやら怖ろしいやらの此の心を生沼に逢ひ述べたくて堪へられませんでしたので、御断を致して馳けて生

沼へ参りました。私はこの途中口の中で惡者惡者と云つて馳けて居ました。生沼は留守で、生沼の母上に會ひ嬉しい心持やら、母に不孝をして居た事やら、今迄世話になつた事の禮を述べ、初めて生沼の佛壇に御禮をさしていただきました。夫れから家へ戻つて参り、母に向つて三十年來且つて下らざりし頭を下げてまして、今迄の不孝を詫び、又御恩の深さを謝しました。私は母に對してこんな嬉しかつた事は生れて初めてあります。難有う存じます。

南無阿彌陀佛……

母も喜んでくれました。姉も喜んでくれました。生沼からも喜んで手紙をくれました。私も嬉しくて實に仕合者は私だと思ひました。

七

扱こう氣付けさして頂きますと、今迄疎く致して居りました親類へ申譯もなく、又友達がよくもこんな交際合悪い者を見捨てずに居てくれたと思ひまして、初めて親類の恩、又友達的情も分かるやうになりました。又人類は物質上斗りては必ず満足の得るものでないと云ふ事も悟らさして頂きました。又私の體につきましても去る醫者から、君のは遺傳性のものだと云はれまして、父の恩などは忘れて居りまして、父が大酒家でありましたもの故、年漸く長じましてから父が酒さへ呑んでくれなかつたら、まさか自分はこの體にはなつて居なかつたらうと口にこそ出しませんでしたが、竊に腹では思つて居た事もあります。

電車などへ乗りましても、時として羨望に堪へなかつた事もありました。又子供でも連れた人を見ますと一層感じました。

煩惱とは實に怖ろしいものであります。取返しの付かぬ事や及ばぬ事を、夫れを取返しの付く様に思はせたり、及ぶ様に考へさせたりして、心の炎を燃やし、果は恩人迄も恨みます様になります。私は二十年來たへずそんな事で心を悩まし、遂には亡き父まで恨む様になりました。然るに今日では斯様の體に生れ参つた此の因縁が殊に難有く思はれます。

若も理想の家庭を造り、理想の子でもありましたら、現世の快樂にのみ耽り、尊き御佛の御慈悲にも遇ひ奉らず、徒らに日を暮らして仕舞つたかも知れません。然るに今度は不思議の御本願に遇ひ奉りまして、この不具反つて何たる仕合になつた事と喜び、近頃では亡父を恨みました事の實に淺間敷き限におもひ、心より深い慚愧に堪へられませんか。

尙告白の時妻の解決を申し上げませんでした故、大分疑問の方が御座いました。これも御心配下さる方へ一言御禮旁々申上げて置きたいと思ひます。その件は美はしく別れる事となりました。夫れに付けまして私は最初斯様に思つて居りました。信仰にさへ入ればこの問題は自分の心がさつぱりとして自然に圓滿の解決がつく事と斗り思つて居りました。然るに其後妻にも遇ひましたが、多少應對位は變つて居つたかも知れませんが、心の中では矢ッ張以前と同様です。茲て私は一寸變に思ひました。

佛様の御慈悲があれば、こんな心は無い筈だにと思ひまし

て、私は信仰に入つて妻と別かれては世間の手前もあり、又倫理道德から見ましても、離別など云ふ事は反する事なれば、その位の事は自分の道德心に訴へても出来得る事に思つて居りました故、一寸行詰まつたので有ります。

然しよく／＼考へて見ますと、まだ／＼大に自身を買被ぶつたり、且つ驕慢の心になつて居た事と氣付けさせて頂きました。先生の御講話に倫理道德はある點まで行けば突當つて、又煩悶する事があると仰せらるゝのを伺つて居りましたが、自分はそこには氣が付きません。且自分は斯様な小さな道德さへ守れない罪惡深重の凡夫でありながら、御慈悲さへ頂かれ、ば偉大なる佛様と同様の心持になれるやうに思つて居まして、驕慢の心を起して居りましたは實に／＼慚愧に堪へません。歎異鈔の御言葉に『つくべき縁あればともなひ、はなれば縁あればはなるとあるを』と云ふ理も知らずに自分が大きくなつた様に思つて居ましたは、實に恐れ入つた次第であります。若も惣じ自己の小なる道德を以てこれを自身に解決致しましたら、必ず永久に相互が大なる煩悶を求めたかも知れません。

深い／＼御恵みに預りながら、誠に御愧かしい惡罪深重の者で御座います。

八

私の心はトゲ／＼の茨の木の様なものであります。よくも／＼大慈の御恵の露を宿らさせて頂き、今までに覺へのない樂しき新年を迎へさして頂きましたは、偏へに大恩ある近角

先生の御親切なる賜と深く／＼心の底より感謝の御禮を申上ます。誠に忝なく存じます。

南無阿彌陀佛……………

御慈悲になれた横着者

三須善太郎

偕て此度は不思議の因縁に依りまして、眞宗他力安心の決定する處腹藏なく心底を打明して書出せとの近角先生の仰せを其儘に受け文盲の筆も省りみず、求道の同志諸君の御方と此喜こびを俱に喜ばせて頂きたさに、爰に紙面を汚す次第で御座います。夫に付きまして、斯様な難有事の時節の到來致しましたのも、日來先生の御聞かせの御親切なる事を思ひ浮ぶれば、遇ひ難き僧寶の恩如何して之を謝すべきぞ、更に其思案なし、唯念佛して佛恩を深く謝し奉るばかりなり。夫につけても求道同志諸君の常に御熱心の參聽と、又御信仰の堅固なるに驚ろかされ、或は引かるゝがごとく、或は追はるゝがごとくにて、更に躊躇するの餘地を見とめず、何時の間にかは終に今日の此喜こび、同朋の涙は今私しの袖をしぼりつゝ、唯今此所にて思ひ出しましたから、嬉しさを昔しはそてにつゝみけりこよいは身にもあまりぬるかな」南無阿彌陀佛々々々、と爰に一言の謝辭を申し上げまして、尙又紙面を汚す事の痛心に耐へ難き事に候へ共、聊か過去の経歴と入信當時の状況とを申上げ、恥を法界のちまたに晒し、罪を大悲の親様に任せ奉りて、求道同志諸君の班に列する事を今己に得た

り。嗚呼難有や勿體なや、南無阿彌陀佛／＼／＼／＼。

偕て私も眞宗の家に生れました。母の體内に居ます時から念佛は聞いて居たには違ひないと思はれます。年を重ねますに隨ひ、漸々に横着に流れまして、子供の時代は却つて親に連れられ法談も能く聞かせて貰ひましたが、最早二十歳前から實に罰あたりの徒つら者になりました。親の胸を痛めました事は、三十歳前後の頃が一番ひどい様で御座います。未だに安心させる事の出来んので、自身で自心をながめてあきれる斗りで御座います。又私共の土地では、眞宗の御説教は、毎日一朝と晝と晩と御座いますので、私等の両親は、本年七十四歳になると思ひますが、なんても三十五六歳の頃より氣に掛け出した様で御座いますが、つまりかゝる土地柄故、子供の時代が今日とは違ひまして、御寺を遊び場として、御説教でもあれば何よりと其所へ集りますから、自然々々聞覚えまして、終に其弊から御慈悲に慣れて、仕舞つたので御座います。近角先生に、お前は御慈悲なれて、今日では横着になりて仕舞つたので有るとひどくやられました。夫れで初めて知りました。又私共子供時代より三十歳位迄聞きましたのは、先づおそろしき地獄と、榮養榮華の極樂とを兩立しての御説教で、仕舞掛けに俗諦の事を少し斗り申されま

す。夫ですから先づ來聽者は、老寄と子供が多いやうでした。聞き手の側の種類を分けますと、第一極樂を望み、第二がせめて地獄丈けでもさけたいと、あはて／＼佛を念ずると云ふ風で、年頃の者は魂とも佛とも思はず、是即ち横着の側で御座います。處て私は二十二年六月、二十一歳になる女子が不治

の病氣に罹り、諸神諸佛を祈り一心に念して居ます處を、同町内吳服商店主人（廣島十日市町野村嘉兵衛様御舍弟卯助様）の御兄弟より忠告を受けまして、なんでもあれは氣の毒である、何うも見ては居れないから、御寺様を迎へて聞かせる事を計へと云はれまして、早速其事申さけました處、娘も大に喜びまして、頂だいてあつた處の御水も御菓子も、外に洗米等の物も相生橋の上から川へ流して仕舞ひ、左様致して四五日間西寺町品行寺老院を迎へて御法りを頂き、其喜ぶ言葉に曰く、やれ／＼是迄願ひ祈りし神様や佛様とは丸て事がかりました、先のは胸の中が究屈て／＼ねばあせが出よりましたが、今度はかたまりが丸てとけて樂になられて、難有や嬉しやと喜び／＼念佛するのを目前に見まして、夫程に眼に見へて利益が顯はれる者で有るかと、大に感化を受けまして、夫より佛敎の大意如何と、研究的に心を傾むけて聞きましたが、一向分りませんので、又其頃には僧俗間俱に靈魂の歸着を付けるのが第一で無始以來の迷ひの念を拂らつて仕舞はねばいけんと云ふ事が重になりまして、夫から靈魂の歸着を付けよう／＼と一心になり、結局神體は一體である、別に體と魂が有るわけの者でない、之は別に分けて見る人には未來有り、又一體に見れば迷ふ物もさとの物もなし、結局之が宗教の一般大意である、要は此心の堅固なるとならざることによる物なれば、先づ是で一物もなしと云ふ心の堅固なる決心が、即ち靈魂歸着であると、此所に甫めて靈魂の歸着は一段落を着けました。然様致して其通りを人々へ云ひ振らしめたが、是に賛成する處の人物は思はしくないので又好きな人

々は更に相手にする者もなく、唯獨り舞臺で暫らくは送り出した。去る三十年より静岡縣榛原郡菅ヶ山石油鑛山へ首を突込みまして、三十一年九月同郡相良町へ古郷の廣島を引揚げまして移りまして、同町に眞宗寺院は唯大澤寺が一ヶ寺で御座います。此寺に報恩講と外年に二回位の御説教がつとまりますのを欠かさず参聴致し、尙同町に幸ひに金物屋老人小山彌兵衛様と云ふ御方が親切に何時も々々々難有處も、理屈張りた話しも能く聞かせて下されましたが、涙の出る様な話しは誠に聞くのが嫌ひで、理屈張りし話がすきて、最とも其御老人は漢學の素養の有る御方と見へまして、何つも佛説と聖人の道を講じて、此御老人の十八番が善導大師様の名物の機法二種深信の御話しで、之を御話しの時には涙をこぼしながら、善導大師でさへ「我身罪惡生死凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁有ること無しと深信す」と仰せられてあるに、夫に一生造惡不善の我々が、然うは思はぬ、嗚呼淺間敷き者であると言うて、涙を拭き「云はれますと、何んとなしにゑぐられる様な氣がして、いやに辛らく思ひよりました。其内の御袋の御話しか、何つも「ネー三須さん、若不生者の誓ひ故信樂誠に時至り、一念慶喜する人は、往生必ず定りぬ、難有いじやあござんせんか」と言はれても、難有には難有いが左程にも感じる事が出来ない。夫は其筈で御座います。肝腎金目の一念と云ふ玉ぬけの聞き覺へ、繪に書いたばた餅安心で、夫を并べて喜こんで居たので御座いますものを。夫を今昔しの夢めと云ふ事が爰に知られて、御老人の親切の難有い事を深く喜びます。御老母様は今に存命。御老人

には去る三十八年往生を遂げられました。今私しを淨土より御覽じて下さるゝ事かと、嬉しさ懐かしの涙に、筆を染めて嗚呼難有や、南無阿彌陀佛々々々々々々。

醫者て其後四十年五月當地へ引移りまして、淺草別院築地別院へ參詣致しましたが、何分に遠いのと、又偶々參りましても容易に聞く事が出来ませんので、何所かと心尋ねに心掛けて居ます内、一昨年六月愚妻の精神病の際、御顔丈見覺へのある一醫師の方が私の店先さへ御出になりましたから、愚妻の病氣の事申候處、「イヤ夫は醫藥の療法は無効で有る、佛教の説教とか、又は演説などは嫌ひか」、「大好きで御座います」。「夫れならば大學正門前に求道舎と云ふ物があつて近角先生の御法話が毎日曜日にあるから、夫れに限る」、「夫ては何分とも宣敷御願ひ申上ます」御約束致し、二回參聽致させますと、夏季傳道に先生が御他行なされ、御歸京の時も彼の御方の御親切より御さをひ下され、今度は私が一番出掛ますと、同道にて參聽致しました。其日丁度休暇後の初めての日で、所々の御土産談を始めに聞かせられ、漸次に御信心談に移られ、私も初めての先生の御法話を聞くのですから試験的に聞き始めましたが、是はよき御法話で有ると聞きました。濟みましてから九州福岡縣有田廣さんとか申す御方の告白が御座いまして、大になかされました。後は私が參聽致して、夫を家内に受賣する事に致しまして、初めは家内の爲で、終は私の爲になりました。夫れより後十一月中旬の頃に、私の胸に長年の間の宿題となりて在ります事夫を左に申上ます。

第一『御改悔文』中の「たのむ一念の時」、『歎異鈔』第一章の末

文に「往生をば遂るなりと信じて念佛申さんと思ひたつ心の
おこる時」又『御文』様の中「一念をもてば往生治定の時刻と定
め、其時の命のぶれば自然と多念云云」。以上の三件で在りま
す。其外に未だ「一念歸命」とか「初機の一念」とか幾らも在り
ますが、皆迄知らなくても、二ツ三ツ位ひは知らない、人と
話をする時大に差支へがあるのと、又是で困らせられたが
遠州の金物屋の老人なので在りました。先生に問ひて「先生
私は最早御信心は決定致して在りますが」と右の内の三件を
問ひました。先生は少しく首を傾むけて、「御信心を頂きて
未た是れが分らぬと云ふ事はないはずですが」と云れました
から、「イヤ私しの御信心は、長年の間に聞たり見たり致して
の御信心ですから、彼時此時と云ふ様な事は更に在りませ
ん。先生は「夫でも信前と信後の味いと云ふものは自然に分
るものであります」私「イヤ私の信心には、信前信後は付られま
せん」「夫はなぜです」イヤ子供の時より自然に聞覚えたので
すから、其何時を前とし、何つを後とも云はれません」と。
すると先生は、「イヤ分りました、丁度君と言葉は違うが結局同
じ事である、夫は此間他家で、内の主人が云ふ事に、私は先生
最早や何も不審は有りませんがどうも大やうて困りますと云
はれるから其人に譬をもつて話を致した事が有る、夫を一つ
話して見ませう、此所に一人の道樂な男子が在りて、金をつ
かつて困るから、親がいけんをすると、イヤ誠に申譯がない、
悪るうござりますと云うてあやまるが道樂が更にやまない、
何も彼もよく承知をして居て、金をつかうので有る、まだ／＼
と餘裕がある、金を力にして、親の心を何とも思はぬ横着心

である、君のも夫れと一ツで、彼れも知りてゐる、是も聞いてゐると云ひながら、一念の時、往生治定の時、思ひ立つ心のあこる時、是が知れないのは、未だ如來様の前に頭が心から下りて居ないからで有る、結局長年の聴聞で難有い事を澤山聞て、御慈悲徹れて仕舞ふたので有る、極々横着心で有る、高い所へとまつて居て、如來様の御慈悲をながめてゐるのであるから、何時迄待つてもながめて居ては分らない、如來様の前へ心から頭が下りた處で、甫めて此心が分るのでありますと云はれました。其時には實に何とも彼とも唯残念でした、長年の間掛りて漸く出来上りて喜こんで居た御信心を近角先生の一言に下に、盡併にせられて、參聽諸君に面目を失ない、腹の立つのとはづかしさに、もう本日限り中止と思ひましたが、又今度の土曜日には矢張り九段へ参り度くなりまして、参りましたが、十二月中旬より病氣に罹り、參聽は中止致しました。其後は始終雜誌や其外『懺悔録』『信仰の餘瀝』などにて、一月より十月迄風邪より肋膜炎にかかりまして、長い間本斗りて日を送る中、病氣の床の中でふと心付きし事は、「若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生」此の御文は先生が一昨年九月十一月頃の御法話で、何十度聞いてますか分りません、之を思ひ出し彼佛今現在に在ます、難有い事である、是れ迄は法藏比丘であるとか、十劫の古へとか、釋尊は三千年昔しとか、古物扱かひにしたのが悪かつたと思ひ初めまして、非常に難有くなりまして喜こんで在りました。

偕て此所に一ツ恥を晒さねばならぬと云ふは、さてはづか

て斗り居ました。夫に存命兄弟五人の内て、私を一番に疎く父はすると云ふ念が、二十歳已前より在ると云ふ様な感じ熾んに發りて、夫故今度は御慈悲をもて隔心を去らせたいと此事胸を覆ふて居りました。結局父が私を隔てると思ふのが主で御在いました。夫のみならず父は常に頑固で在ると云ふ念が大さに障りになりまして、一月廿七日土曜日九段の説教所へ参りました。當日の御法話も先生十八番の大悲と生みの父母と、兩立て御聞かせになりまして、御法話が済みましてから婦人の方へ、親は片輪の子が餘計に不憫であると頻りに御話しが出てます中に、御免を蒙りまして歸途に付きした。歸宅直に食事を致しまして、已に済まして、本日の大悲親と生みの父母、片輪の子云云の受賣り話を致して在ます處へ郵便が何時でも、ア・イと返事を致しますと置いて行きますに、待ちて居ますから、愚妻が出参りまして、判が入りますかと申しますから、ハテナト思ひました。すると三須の御母さんから手紙が参りました。夫を受取封切りて見ますと、私へ病氣見舞云々母より本の心斗りの見舞として、送金云々の手紙で御座います。夫を兩手に捧げて頂だまして、母は實にやさしいが、父はひどいて、幾らでも母の呉れたのが難有い、母の五圓と父の五十圓でも、まだ母の方餘難有、如來の御慈悲は今此所で有る、何時も近角先生が親と云へば直に金に目を付けると云はれるが、夫れは世間普通の事で有る、如來様の御慈悲は、金には目は掛けぬ、母のやさしい心中が難有く、夫を頂くので有る、父の方は幾らでも自由に、誰一人氣を兼ねる者はない、其癖をすいて餘計送る心配は更でない、な

しい事では御ざいます、是が爲め皆様が同情の餘り、一邊の念佛の種に相成れば誠に結構で御ざいます。夫は私が眞實妙に歸命するの糸口で御在います。私は去る三十一年に古郷廣島を立上りてより、一度も國に参りませぬ、本年三月には、是非とも出廣致さねばならぬ事が御在います。夫は何かと申せば、實兄の次男を本年十五歳の子供で生れし時に、私に子供がないので私の子と云ふ事に約束致して御在いますので、是迄もなく私の方へ引取るべきを延びにのびまして、序でに小學校が終る迄と、實に横着を極め込んで居たのですが、本年四月から學校時代が中學校に代はりますので、何うしても行かねばならぬと云ふ事が、一月に新玉りましてからは、もう目先に見えて來ました。先方より連れて來て貰へば費用が大きに財かるが、行くにすれば十五年目まで有るから、彼是と費用が大分掛る、先づ行く事に決定致しました。三十一年遠州より参りました時、兩親と安心了解の話しを致しました時、私は夫は彼靈魂歸着と云ふは神體別物にあらず一ツである、此覺悟が出来在りさへすれば夫が即ち他力安心であと云ふ事をくどく申ますと、父の申すには夫は親切に難有い事ではあるが、然う云ふ御慈悲は如來様の御慈悲とは九で違ふから、連も二人の親や此の兄には難有くないから、貴様の御信心話はどう中止して呉れ、互ひに念を入れてよく聴聞するがよいと申しまして、別れてより、父の安心が異安心であると云ふ事が始終其後私の胸に存在して、此度幸ひに大分修行が積んだから、父にとき付けて、なんでも聞かせたいと云ふ念が屢々發りまして、一月になりましてからは、寢て考へ

ぞと母の手紙が又頂きました

偕て父とか母とか子とか申て、斯く書きますと、いかにも愛らしく見へますが、最早兩親は七十四歳で御在ます。私も何つの間にやら年老の暮れ行く秋の霜を頂き、親に甘へし長の夢覺めて驚ろく身の科に、體の汚を落さんと、手紙を篋盆の端に置きまして、夫より元町の泉湯へ出掛けました。道すがら考へつゝ母の方は何にも氣掛りはないのです、唯父方頻りに氣に掛り、何んて父とはあんなに隔て心が在るので在らう、同じ親で在るに不思議で在ると思ひながら、入浴致しましてからも夫れ斗り考へます中に、日來先生より何十度も聞いて在ます處の、統て人間は他人へ對する時には自己を中心として向ふので有るから、其間に自然に隔て心が發る、此心がどこ迄も付き廻るからいけないとの言を思ひ出して、彌々父の私に對します小供時代よりの事考へて見ますに、何も親として缺けた處は見出しませんから、今度自分はどうて有ると、今日から矢張り小供時代迄の所作を一通り考へます中に、學問嫌ひで徒らが好き、年經るに隨ひ漸々に其徒らが大きくなり來りて、未だ今日迄も心配さして居る事、一目に見へ、尙其所へあまたの子供をそだてたが、貴様が一番に心配さしたと申せし事が又浮びましたら、親が隔てたのではなくて、自身の徒らより發りて自身で自身をしり自身の中鬼にせめ立てられて苦しんで居るのであつたかと、ヤレ残念や淺間しや、濟まぬと思ひ出し前後を忘れて傘も打忘置き道すがら顔に手拭を覆て、漸やく歸宅致しました。家内何も譯は分りませんから、マアそんなに動心を發して、何をし

たのです。「イヤ云ても分る事でない、設ひ泣き死んでもまだ罪は消へない」。「夫は一體何んの事ですか、そうひどく泣いては又病氣に障ると悪いから、まあ大概に泣いてやすんては何うです」と申すから、又私が寝みませんと家内が困ります故寢床に就きまして、手拭或枚用意して、朝迄にひやしに居りました。偕て此所の味は其人々の境遇によりて少々の差は有るとも、大差なきものと存じますが、偕て寢床に入りて後「アラ難有や」と我身の惡事が一時に知れて、今心付かせて頂きし事の大悲の洪恩を喜び、又我身の惡るさと思ひ、唯大悲の恩と我身の惡と兩立して、唯泣き喜びと申す外に形容はなし。正に對面の前に使者の言葉は不用とは、今初めて明らかに知らせ頂きし事の難有さよ。南無阿彌陀佛々々々々々々。ア、樂になりました、難有く存じます。長い間の御苦勞を掛けました。南無阿彌陀佛々々々々々々。幸徳傳次郎に勝る大罪人て御座りました。夫を思へば又聖恩の程も山より高し、我身の罪は海よりも深し。生みの父母には體内に在りし時より苦しめました。何れに向いても頭をたれて報謝の念佛を雨山に稱へて佛恩を報じ奉り、唯喜ぶばかりなり。南無阿彌陀佛々々々々々々。四十五年貳月五日

大草慧實師と悼む

近角常觀

今日は淺草本願寺の輪番の大草師の御葬式の日であります。私も先日より引續き詰め切りて居りました次第であります。今日も朝より休みて淺草へ参らんといたしました。が、また考へてみれば、同氏とは一身上に於て、非常に御恩を受け、又學舎としても、深き關係をもち居る同師のことゆゑ、今日の講話は全く同師の追悼の爲に開かして頂かんとおもひ、講話を致す次第であります。種々自分の心に思ひ出す事をお話し申して、同師を慕ふ萬分の一をば皆さんに申述べることゝいたしませう。

まあ以前より、さかのぼりて申せば、丁度明治三十年頃の事でありました。同師にお會ひ申して交際を結び、今日に至るまで少なくとも十五年間の交である。實にこれほど長い間、深き交を結びお世話になりしといふ事は、殆んど二人となき事でありました。此十五六年間の事を種々思ひ出せば涙の種斗りでありました。丁度私が明治三十年の頃は帝國大學をまだ卒業せぬ前にて、其前にも無論二三度は淺草本願寺を訪づれ、大草師にも御目にかゝりしも深く同師を知りしは、私が明治二十九年の頃始めて信仰に氣附かしていたゞき其後より始

まりて居る、かく考へれば、私が佛様の慈恵を頂きしより今日に到る迄、これを保護し、助けて下されし次第であります。

明治三十年頃は信仰に入りて私の心は未だ寛で、心のどかに帝國大學の後一年をやりある時でありました。其頃度々淺草へまゐり、常に大草師と氣樂に交際して貰ひ居りしが、丁度明治三十一年の頃にかういふ事がありました。それは我御法主臺下が當時新御法主にてあらせられ、東京へ御上京相成りました。此時私は大草師のお手引きにて始めて親しく御めにかゝりました。當時は京都におはしまして、將來の宗教界に就き種々申し上げて居られし事を記憶いたします。

其三十一年に私が大學を出てまもなく、巢鴨の監獄問題が起りました。それは政府が耶蘇教の宣教師を監獄に入れた爲に起りましたのであります。其時一方、宗門の方では、新法主臺下が東京へ御上京あらせられて御勉強なされる、御運枝方は或は臺灣に、支那に、赴むかるゝ、様なことのありしも此頃であります。監獄問題につきては、大草師が常に其問題の焦點となり、一心に遣り貫かれました。遂に其熱心が貫徹し、遂に耶蘇教の牧師を監獄より出す様に出来たのであります。これは約一年間に渡る問題であります。其間大草師が心身を抛ちて盡力され、私も及ばず乍ら、信仰の立場よりやりました。其時から、若し暇が有つたら自ら監獄の人に話をしたいと志してありましたが、今日それらの監獄の人々に法話を聞かせることが出来たのも全く、其問題が無事に貫徹したお蔭といはねばなりません。

なほ進みて、引續き宗教法案が起り、大草師の熱心は一通

ではありませんでした。何時でも大草師は宗教殊に佛教の事に就き宗派と云ふ事を非常に熱心になる方であつた。日本國、皇室の事となると、身を捨て盡力する。大草氏は本願寺の末寺の中にも外のと違ひ、先づ例せば、公卿華族の様に、家つきのお寺故、其御本山とか、御法主とかいふ事につきては、私共何時も考へるに、あゝも熱心になるものかと、感嘆するのである。何事によらず、事起れば先づ自分の命を捨て、かゝりて、先づ心を披瀝するので、他人が皆其熱心に動かされ、其主張に賛成をして、動くと云ふ次第であります。宗教法案の運命に就きても、一通りならず困難なりしも、師が常に盡力下されしは、今なほ感慨にたへぬ處であつて、誠に感謝する處であります。

又此學舎も其後、島田善根翁が此家を頻りに買ふ様に進められたので、大草師に計りましたら、同師が新御法主に申上げ下され、遂に其お手元より買ひとられた次第であります。かく事實の事を段々と申し述べますと切りのなき事でありました。かく大草師とは監獄問題、宗教法案等にて身心の苦勞、艱難を共にして働きました。今もなほ思ひ出しますが其後、私の西洋へ行くのを非常に残念がり、大層止められ、今君が行つてしまつたら日本の宗教界を如何すると云ふておられました。其事を回顧せば、何もかも實に感慨に堪へませぬ。

明治三十三年より五年後佛骨奉迎と云ふ事がありました。此時も大草師は非常に心勞されました。當時新御法主は「サ

イアム」へ趣きたまひ各宗の代表者として、多くの人と共に佛骨を奉迎されました。其後の事十有餘年委しく申せば切なき事でありませう。かく私が信仰に入りて後何等の事にも信仰の自らの確信を現はさざりし時、自分の助けなき時に、かく宗教問題等總て今日に到るまで信仰の語の出来る様に助けて下されしは、全く大草師の非常なる御盡力によりし處であります。歸朝後も萬事につきて助力を仰ぎ、又何事に就きても見を徴せられると云ふ次第でありました。三十五年に歸朝せし時も、宗教の方針を如何するか、積極的に社會に打ち立ちて事實的にドシ／＼やつたらいゝであらうと、待ち設けられたのでありましたが、私は信仰が根本ならねば駄目故、如何しても、引込みて信仰を話したいと云ふので、外界より頻りに進められるにも係はらず、以後長い間、信仰の語をする様になつたのであります。一方からいへば私をヒイキにし、守り立てゝよくしてやらんと思召して下されし御好意を、信仰上辭退せねばならぬと云ふのを頗る心苦しく思ひました。十有餘年、夢の如く、あれと云ひ是といひ、此間に何につきて、同師に關係のなき事はありませぬ。何とやら同師の事を申しのべるのが、却りて自分の關係を申しのべる事が多くなりまして、是皆同師の宗門に盡力されし事でありませう。私の歸朝後、淺草へ御法主が來りたまひ、淺草にて御勉強せられると云ふ時も、非常に御苦勞下されました。清澤先生が東上されましたのも、此時でありました。先生は故郷に居られたのでしたが、誰か東京の青年の信仰を指導するものがなくてはならぬと大草師が心配せられて、上京をうながされたのでありま

した。清澤師は此學舎に私の洋行中浩々洞を經營せられ信仰の話をなさいました。眞宗大學が東京に建つと云ふことにつきて、大に力を盡され、何一つ大草師の力に寄らざる處はありません。數へれば極りなき御恩をば宗教界に蒙つてゐるのであります。

今日はかく皆さんが講話を來聴せられたのですから、殊に力を入れて申し度いは大草師の信仰につきてあります。今申す如く、實に至誠忠義一途の人故、殊に僧侶の位置を重んずると云ふことの深い人でありました。何處へ顔を出されるにも、法衣でなくともよき場合にも、必らず法衣を纏ふて出られる。よく僧侶の道を自覺し、僧侶の位置を落さぬと云ふ人でありました。されば法を實に大切に致されました。宗教上の總ての事を重んずると云ふ事が深くありました。其志の深き事は稀なる處であります。同師はかね／＼かく法に志深く貴んで居られました。特に其信仰の一層圓熟されましたは、其此度死なれた病源の胃病に罹られし時、非常に信仰に苦心されました。前にも申しましたが、今日はもう他の點ではない、此一點が何より大切で皆さんもよく心を靜めて聞いていたゞき度いと思ひます。私のかく申す間にも同師と一寸一分も隔りなく話の出來てゐるのも、信の一つ故であります。

事細しき様なれど、有り様にお話しいたします。これまで御聞きなされし方もあれど、始めての御方もあるやうです。から、今一應申します。同氏は私の雜誌も讀みなされたが、あゝ云ふ實際事故、求道は大層むづかしい、もつと簡單にわかりやすくしては如何であるかと常に云ふて居られた。もつ

と人によくわかる様にせよと云はれました。かくの如く、實際問題に着眼して居られし故、私の社會に對して活動して居つた時には大に賛成で居られたが、消極的に純粹に信仰問題をやりある時は、何となくあきたらなく思はれたであらう。處が病氣に罹りなされてより、段々と信仰の事を非市にお感じになり、殊に安心をせねばならぬとつとめられました。私も申し譯なけれども、あまり親しき間故、特にお話しやうともいたしませんでした。處がいよ／＼とりつめて苦心されし頃、丁度同氏は京都の御自宅に病に伏して居られました。私も其時京都へまゐりましたので、私にお宅へ來りて法話をしてくれとの事があり、非常に熱心に聞いて下さいました。或時は旅中御病氣悪いと承り、長い信仰の手紙を認めて上げた事もありました。一昨年の夏でありました。私が丁度夏期傳道より歸りましたら、求道の第何號を送つてくれとのお手紙を下さいました。又合本があつたら呉れぬかと云ふて越されました。實は甚だ耻かしき話なれど、あまり親しき間柄故常に求道も見て居らるゝのに今更ら呉れと云ふは如何いふことかと實は驚きました。て早速入院して居られし、岩佐病院に同氏を訪ひました。其時同氏は遠慮心と横着心と云ふことを非常に感心して居られ、これはまことに、私の心によく當る、その文を今一度讀みて見んと思ふと云はれた。これは始めての方もある故一應おはなしいたしますが、常に私の申しませう、横着心とは自分は悪くても助けて下さると甘へて居る事で、遠慮心とはもつとよくせにやならんと、遠慮するのであります。横着になりて日を暮し、遠慮になりてお慈悲が到り

届かぬ。如何にも同師の申さるゝ通りである。同氏は實によく云ふてあるとて愛讀されました。事細かしい事を云ひますが、如何にもこの様に云はるゝに自分が今迄御無沙汰したは申澤なき事であつたと、しみ／＼感じました。其後其御夫人の方が亦重病にかゝられ、後より聞けばいよ／＼危篤と云ふ程であつた、其時に大草師が夫人の枕頭に何氣なく云はるゝには、「お前は私より先に來るのかな」と云はれた。夫人は戲言にそのやうなことを云はれるのかと思つて、ふと御夫人の顔を見上げられたら、如何にも眞面目に心配氣でありました。それで夫人は非常に我身の上を驚かれ、自分も死ぬるか、今死ぬと云ふ事を知らせて呉れるのかと、今迄長い間聴聞したに、疎に聞いて居たが、佛が助けて下さると云ふのは此處である、と御慈悲がコロリと解らしていただかれしました。私が次の日病院へ参りましたら、ホロ／＼と涙をこぼし、此度は實に難有い事を知らせて貰ひましたと非常に喜ばれました。かく御夫人がとりつめて御喜びになつて、誠に著るしき事を知らせて貰ひながら、人間は誠に横着なもので、御主人が一心に本をよみ求道して居らるゝに、いつも話が中位になつて終つて居りました。御退院後、私の淺草を訪れし時、もはや全快されし御夫人が送り下され、手を合せて、申さるゝには、「此頃はあなたの御本を讀み、切り詰めて求めて居らるゝが、如何も少しの處がまだ安心が出来ぬやうである、それ故、此次來られし時、思ひ切りて云ふて呉れよとの切なる依頼でありました。其當時は大草師は來年の御遠忌の時死ぬのかと云はれました。御夫人はいはるゝには、來年の御遠忌まで生き長ら

へて、御法事がすんで死ねば甘いが、御法事前死ねばもしれぬ、といはれました。私は其様に、病氣が進まれて、來年御遠忌頃に死なると聞いてさへ驚き悲しむのに、御夫人が現前夫に向ふて、もつと早く死ぬことを平氣でいはれるのを聞いて、信仰の徳とはまことに怖ろしいものと思ひました。いや、そううまくはいかぬ、先へ行くかもしれないと夫に向つて云へるとは、思ひ切つた事である。これほどに成つて居られるのに、頼まれて初めて云ひ出すとは、何と云ふたへた事をして居るのかと我身ながら耻かしく思ひました。親とか親身の者には信仰の話は云ひ憎いと同様に、親しき友には仲々云へませぬ。云へぬとて遠慮して居る事ではない。熱心になつて居らるゝに何時知れぬと引しめて云はざりしは、何と云ふ事であるか、私は其時家へ歸る迄全く佛名を稱へながら歸つた事でありました。丁度今日までのあたり見る處を三年前に見たと同様の心地でありました。同師は宗教のため、國の爲と心身共に捧げて思ふて居らるゝが、死んだら駄目である、長命されたら如何に頼もしき事がと残念がりました。

今日迄厄介をかける事一通りならぬに、若し、此方に取得があるなら此慈悲を話さして貰ふのが唯一のとりえであるに、迫りて信仰の話をせぬとは何と云ふ薄情な者かと全く私の頭が下りました。國府津の或人の別荘に行かるゝ時尋ねる約束なりしも、待つて居られぬ。明る日起るなり、トカ／＼と出て行きました。此時御夫人が御良人に向ひ、丁度あなたも御熱心に法を求められ、近角さんも、ドシンケンに話して下されると骨折つて居らるゝから、お話し遊ばせ、と合槌をうた

れ段々話が進んでまゐりました。大草師は至極淡泊な方故、「如何も解らぬ、先日聞けば、道樂息子、親の方から頭を下げて下さるので家へ歸へらずには居られなくなると。成程左様だらうと思ふが、如何も其氣がせぬ」云はれました。又「何やら少しのところが解らぬ、自分は何れ死なねばならんとは思ふが、今晚死ぬとは思やせんぜ、こんな道樂者が、何れ親の處へ歸らんならんが、未だ金があるから、金がある間は使ふて居る様な者だ、今日も無事だらう、まあ、五十兩、三十兩、氣もち悪るゝ道樂してある道樂者の様である」と實に適切な例である。そんなら病氣がひどくなつたら御信心頂ける事だらうと思ふかと云ふたら、金が無くなつたら頂ける事だらうと思ふと云はれました。それはいかぬ。信心を戴くのは境遇がせまりて、頂くのでは無い。中にも青年の人は逆境でなければ信心はえられぬと云ひます。説教された人でも命おはる時でなくば、こんな事ではまだ／＼と思ふて居る。私は其時何氣なく云ひしはイヤ境遇迫るので信仰いたゞけるのでは無い。今晚死なぬと云ふ事は決して無い、自分では未だ／＼と思ふて居る。病氣はまたよく成るだらう、よくなるだらう、今晚ぢや無からう、よくならねば困ると一寸／＼引のびしある、如何も取詰めて戴かれぬ。其時に私はよく申す事なれど、ソリヤ、あなたが金を使ひ果して親へ歸るには非ず、金使ひ盡しても歸れぬ／＼で、ヤッパリ歸れぬ。セツバつまるから歸られるのでは無い、何時までも香氣にして居るものを、待ち受けらるゝ親の慈悲を知らせて戴く時、これほどに待ち兼ねて居らるゝのに、親のやるせなさ心をも知らず、

香氣にして居る處へ親自身出てきて、何故親の心を知つて呉れぬかと迫られたら如何する。金が余りてあらうが如何あらうが、親の言葉の下に、かく思ふて居たが實に申譯なかつた頭が下るではないか。苦しいからと云ふて御親心を戴くのではない、香氣にして居る者が哀れと云ふ親の心を聞かして貰ふなり、ア、今迄は濟まなかつたと忽ち親の膝下に歸るとが出来る。自分は健康ぢやまだ死なぬ／＼と云ふてあるが、佛の御眼から見ればまことに哀れとおぼすであらう。(今現に淨土より大草師は夢の世ぢやぞよ、健康を頼みにしてあるのは實にはかなき事と思ふて居らるゝであらう) かく頂きてみれば、待ち兼ねて下さる御思召一つがありがたいのである」と話したら、同氏は「如何にも左様ぢや、よく解つた、がいよ／＼如來様がほんとに云ふて下さる處が受取り憎い」と其時私は如何して云ふたか、もう腹一つばいになり居りし爲、ソナナラ云ふ、實は今日迄あなたに甚だ濟まなんだ、あなたは今晚ぢやと思はんと云ふて居られるが、今晚だつたら如何します。幸ひ御縁ありて、長い間お世話になつて居るが、若し生き長らへて、大に活動しなされたら、宗教上、世間の爲、末頼もしき事にて、及ばずながら心を同じくしてやり度けれど、何時知れぬ御身を抱へてゐられるといふことを聞けば、若しや其時節の來た時は、かく長い間交りて御世話になりても、別れる先は別となりてしまふては實に残念である。唯信鈔にも、

今生夢の中の契をしるべとして、來世のさとりのおまへの縁を結ばんとし、我後れなば人に導かれん、我先きだゝは人を導かん、生々に善友となりて佛道を修せしめ、世々に智識

となりて共に迷執をたん

それぢや長い間御縁あつて交際して居るが、いよ／＼となつた時には永劫の別れぢや、それも御信心の話せぬ私ならともかく、これより外に取りえなき私が、あなたよりいはれぬからとて、私より申さぬは薄情極まりし話である。今生夢の中の契を縁として來世のさとりのおまへの縁を結ばんとし、先きにゆくも、後より追ふも唯待ち兼ねたまふ親様一つが永劫の契ぢや、かくいへばとて病氣がひどくなりしと云ふには非ず、何時知れぬ我身として見れば、今命終るともまちかねて下さる親様あれば、何時命終るとも御淨土へ詣らして貰ふと安心して居ります故、あなたも安心して下され。佛がまち兼ねて下さるといふ事わからねば、私が今迄申上なんだ事が申譯なき故、何卒頂いて下されと申した。(此の事は實に今は遂に事實となつた、早いか遅いかであるが、先であつた、今はもう永劫の間共に安心して頂くのである) 其時師は私の言葉を聞かれ「あゝ有り難い／＼、よう云ふて呉れた、机を叩きて、解つて信心決定と云ふから、如何しても何か決定してしつかりと握り度おふて解らなんだ、ア、あり難い」と夢のさめる如くであつた。かうなると、私もまた國府津までもついて行つて話をしたくなる。丁度國府津の停車場から見えるが、アチコチ畑のうちに家があつて蜜柑がなつて居る。これをいたゞきながら、大草師と其あづまやで語りました。師のいはれるには、已れみないなものを、此様な結構な別荘へ入れて呉れて、蜜柑はもぎるにまかせ、まるで極樂淨土みたいな話ぢや、丁度極樂の果實をもいで頂いて楽しく暮して居るやうなものぢや、と喜んで

ていはれた。

其時は丁度社會主義の問題など起り、常に種々話して居た。其時いはれしは御文に「かくの如く信心決定の上には」とある。信心決定の上と云ふ事が解らなかつたにと、テーブルを叩いて云はれし事をあげて居る。同師は毫も信心戴いた等とはいはれず、「私は信心戴いたなど云ふことはないぜ、嬉しがり通してはないぜ」といはれてありましたが、コロリと安心いたされたもの故、其後は同師は熱心な切り詰めた人となりてあつた處へ、熱心は昔と少しも變らねど其間に頗る餘地あり、遂に病もよくなりました。

皆さんも昨年夏期求道會の時、あの人の御蔭にて御法主に御本書拜見をゆるされ、また、本願寺にて信仰談話會の茶話會の時には、大草師は簡單ながらも力のこもりし挨拶をされ、昔往信房が聖人に従つて信仰に盡瘁せられし如く、皆さんも、聖人の御信心を御喜びするやうとの言葉であつた。此年ももし御縁あらば又御厄介をいたさ度いとおもふてありましたが早や故人となられました。其様な事が昨年より今年にかゝりて種々な事がありました。法話會などにも一度／＼と云はれて居ましたに、機會がありませんでしたが、先達て出席いたした様な次第であります。かくならんと思ふて居た事が萬年萬端皆な運んで來ました。始めのうちは事實的に、後は信仰問題に力を盡されました。

殊に此度亡くなられたにつき、信仰上深く味はねばならぬ事があります。それは時事問題なれど、三教會同と云ふ事でありませう。其精神等はよく皆さん御存じ故云はねが、昨年

十二月二十六日同氏は内務省に招かれ、其事を云はれし時、大

草師は早速本山の事は知らず私一人として考ふるに、佛教には既に管長制度あり、其管長等と何等の取締りなき耶蘇教と一所にせらるゝは絶対に反對すると云はれました。私は此事は床次氏とは言はるゝ次官の方の御考から起つた事で、大した事も無からうと思ふて居ると、一月十六日頃俄かに同師は私宅の庭より居るか／＼と來られた。病氣の御身故滅多に他へ飛び出して行かぬ、事なきに、外套ぬぐなり、君の智慧を借りて來た、と打明けて云はれた。申すと永くなるが一言葉てよくわかる故、皆さんにもよく了解して戴き度いのであります。此信心の上より致しますと、我等佛の御慈悲を頂き居るものは、之より外に佛を打並べて如何こうすると云ふ事は出來ぬもの故、外の者を認める餘地はありません。佛教と耶蘇教とは一様にはならぬものであります。國の事故致方なしと云ふかも知れぬが、我々は一家の如く一國をも思ふもの故、一般の國民にも信仰を得さしたいと、信仰上より眺めたの故、如何しても道理々屈より云ふても、かくの如き事は成立せぬ。文明とか信教の自由とか云ひますが、信仰の事は餘地のなき話故、遠慮なく云ふが當然である。中には遠慮して云はざりし人もあるに、大草師は即座に答へた。然し本山の事もあればと種々心配して居ました。十数日前も私が淺草の法話會へ行き後學士會へ出席せしに、病人なる同師も共に御出席なれ、其問題に就きて種々御心配なされた。

それよりドット枕に就き、非常に悪くなりましてので、廿四日にも廿五日にも病床を見舞ひました。其間晝夜不斷暫ら

くも念頭に彼問題が放れぬ。佛法を盛にする様に、人が信ずる様に、宗門の態度亂れぬ様にと病中起きてみたり、電話をかけてみたり、ズット心を勞し通してあつた。此度枕につかるゝ迄は身體の工合といひ、様子と云ひ、血色もよし、萬事よろしき様であつた。然るに此二十日以後は段々身體を縮る様になされた。彼此して居る間に皆一々其心に思ふて居られる事、遺言して云ひ遺されし如くであつた。此度の眞面目な事は一通りでは無かつた。今迄種々ありますが、床次氏が大草氏に逢ひ度いと云はれる。折から床次氏より、私の説の斯聞に出てあるのを見て、刷物をよこされました故、同師と相談して行きました。序ながら先程も申ししが其時私は、日本の國の思想界を正しくなし行くにつき、悉く統一した健全な思想にしたと云ふと云ふてありますがと床次氏に聞きました。如何にも其通りと申されました。それでは一個人の通り健全な信念を持つには、あれでもこれでもでは行かぬ、一國に於ても其通り今からあれでも之でもと云ふのでは、却つて多くの人に疑念を懷かしむるものである。私共の心中には佛の外に無き故、此度のあれもこれも合同した事には信仰上、到底忍べぬ事である、と申しました。同氏はよく了解して下さつたが、其爲に中止されるか何うかは分らぬ。兎に角信仰の立場より私の信する所を極言して來ました。

二十七八日には大草師のやられし事を見るに恰も正宗の銘刀が觸るゝものを悉く切ると云ふ様に、信心の上より見る人聞く人に遠慮なく忠言を呈せられた。實に驚く斗りてあつた。二十七日は前法主が御逮夜に參詣された時、御そばへ行き自

分の心中を披露し申上られたら、其忠心をめでられ、私も其様に思ふて居ると申されたら、同氏は非常に感泣して涙が止まらなんださうである。何から何迄法の爲に生きて居られた。中外といふ新聞の記者が見舞ひ、何卒身體を御大切に申されしに、「何、倒れて止むぢや」と云ふて居られた。二度目に床次氏を訪はんとせし時、電話をかけましたら、大草氏自ら出て來られ、「何卒床次氏を信仰に入れてくれ」と申されたので、私は「何卒念じて居て下さい」と申して、行きました。其時は床次氏と信仰の話ばかりが進みました。十一時頃に暇を告げて大草師に電話をかけたら、今は大分工合が悪い、この事であつた。其晩は十回ほど嘔かれし様である。本山の方でも彼問題にはだまりて様子を見て居ると云ふ様な様子であつた。序かた／＼私は京都へまゐりました。出立せんとする時即ち二十九日の晩に同氏を訪ひて別を告げました。之がもしや長い別れではあるまいかと思ひました。三年以前に云ふたは此處である。今世夢の契を縁として來世の縁を結ばんとし、襖のかげで珠數を出して拜み、京都のお寺へ朝十時半つき、危篤のよしを申し上げそれより御本山へ行き御法主に御目にかゝり、事の次第を申し上げ、同師の宗門の爲に盡されし事を聞え上しに、暗涙を浮べ給ひ、又能淨院淨曉院の御連枝方に御目にかゝり、同師の信仰に入りし事を話し申上りました。丁度其時が夜の九時より十一時迄にて、歸途大草師のお寺へまゐりましたら九時十分死に死されたとの報知がありました。直ちに其お寺の五尊様に御禮をあげ、そこに集まつて居らるゝ親族のお方々にお話を致しました。明る日御本山のお朝事に

参詣いたしお説教を伺ひましたら、其時の『御文』に誠に人間は出るいき入るをまたぬならひなれば、誰の人も早く後生の一大事を心に掛けて、信心決定すべきものなりとありました。まことに無常な世であります。如何にも此『お文』をば自分の身の上に頂き、喜ばして貰ひました事であります。京都では到る處で大草師のお話をいたしました。歸りにお寺へよりました時には早や、御法主より賜はりし御法名が下りてありました。歸途、故郷へ立寄る筈なりしも、直に歸京しました。一つ深く私の心に残りしは、かく自分の心配する問題の決せぬ時に信ずる處を云ひ放して、解決を見ずして死んだ事であります。私は京都より歸りても何も云ふ事出来ず、残れるは唯同師が信心、志、何處へ如何して我心を語りてよきかわからぬ、まるで歸るにも歸られず、止まるにも止まれぬ思ひであります。しかし師の身命は無くとも、精神はいや明に残つてあるのてあります。私に残して呉れし使命は實に重い、日本の佛教の上に大なる確信を與へられた。新橋より直ちに、淺草へ行き、棺前にひざまづき、此前に云ふて居られし同氏の御言葉を思ひ、同師の精神を空しくせぬ様に誓を致し、御信心の一つをもつて生死をへだつれども、共に喜ばして頂く事を喜び安心して頂くばかりであります。三晩お通夜をいたし、御葬式は今日であります。昨夜はまだ遺骸がありましたので、淋しさうちにも何となく賑かな思ひがいたしましたが、野邊の送りをするせば、のこるは、信心と佛教を國家に益々盛にする遺志である。皆さんも此永劫の問題をば、心によく入れて同師の遺志をして空しからしめぬ様にして頂きたいものであ

る。同師の如く自分の身體をもつてかくの如く法の爲に盡された事は實にありがたい事であります。かくおもへば、例へ死んだ人の遺骸を見ても悲しくはなけれども、其精神を思へば實に斷腸の思である。國家の爲法の爲す時も念頭を去らぬ師の熱誠は實に何んともいへぬ。同師は常に會津の藩士がかゝれた留守職の始末と云ふのを讀んで居られました。之は會津の精忠の士が京都の朝廷と主君との間に挟まりて、大に苦心されし心事を書きしものである。此書物だけ私は師の紀念にもらひました。私の實にうたれたは實に同師がこれほどの精神もて、しかも餘裕ある心もて、世を去られしことは、に信仰の熱誠と、安心とによる事にて、もう自分の思の百分の一も云ひ現はすことは出来ぬ。云ふに云はれぬ深き事であります。種々事實的の事のみ申しましたが、全く御信心の上より、御受取り下さい。今日は御法文の事なしの講話でしたけれど一々南無阿彌陀佛より他はないのであります。



求道會館建築寄

附金第貳回報告

(四十四年十二月初より四十五年壹月末まで)

一 金壹百圓也	京都府 無名氏殿
一 金壹百圓也	府下 小川健之丞殿
一 金五拾圓也	麹町 南條文雄殿
一 金五拾圓也	京都 松本文三郎殿
一 金五拾圓也	大連 穴澤清次郎殿
一 金五拾圓也	熱田 鈴木治左工門殿
一 金五拾圓也	府下 白鳥庫吉殿
一 金五拾圓也	下關 土井重吉殿
一 金參拾圓也	麹町 丸山源藏殿
一 金參拾圓也	新潟 小松原謙三殿
一 金參拾圓也	京橋 千秋よし子殿
一 金貳拾圓也	朝鮮 辻謹之助殿
一 金貳拾圓也	芝 樺島信太郎殿
一 金貳拾圓也	大崎 松崎壽三殿
一 金拾五圓也	東京 坂倉はま子殿

一 金拾五圓也	中野 中野老書生殿
一 金拾圓也	新潟 富岡教雲殿
一 金拾圓也	淺草 木多廣善殿
一 金拾圓也	愛媛 淺野聖諦殿
一 金拾圓也	府下 板橋盛俊殿
一 金拾圓也	花巻 宮澤政次郎殿
一 金拾圓也	四日市 安田善吉殿
一 金拾圓也	本郷 東虎二郎殿
一 金拾圓也	島根 市野原彌太郎殿
一 金拾圓也	横濱 岩永法電殿
一 金拾圓也	京都 稻葉昌丸殿
一 金拾圓也	佐賀 森靜吉殿
一 金拾圓也	奈良 佐伯定胤殿
一 金拾圓也	麹町 岡部民子殿
一 金拾圓也	名古屋 伊藤伊之助殿
一 金拾圓也	同 加藤ふり子殿
一 金拾圓也	同 龍山現眞殿
一 金八圓也	豊前 眞田増丸殿
一 金七圓也	神田 千田照子殿
一 金五圓也	芝 徳永勝順殿

一金五圓也	同	藤田真德殿	一金五圓也	朝鮮	福田岩雄殿
一金五圓也	同	無名氏殿	一金五圓也	大森	岡民子殿
一金五圓也	牛込	中野てる子殿	一金五圓也	麻布	千野利助殿
一金五圓也	府下	鈴木松太郎殿	一金五圓也	本郷	酒井ふさ子殿
一金五圓也	豐前	田原大干殿	一金四圓也	新鴻	眞水徳左工門殿
一金五圓也	京都	無名氏殿	一金參圓也	吳	佐々木吾八殿
一金五圓也	本郷	濱野壽代子殿	一金參圓也	大阪	吉木一郎殿
一金五圓也	府下	太田七造殿	一金參圓也	同	勝中半助殿
一金五圓也	横須賀	島田繁太郎殿	一金參圓也	同	田尾卯兵衛殿
一金五圓也	鹿兒島	黒田秀賢殿	一金參圓也	同	熊橋朝一殿
一金五圓也	播磨	後藤龍縁殿	一金參圓也	同	渡邊蘭吉殿
一金五圓也	長野	水野三右工門殿	一金參圓也	同	植田新之助殿
一金五圓也	麴町	田中克明殿	一金參圓也	同	中鹽龍殿
一金五圓也	小倉	上野瀧子殿	一金參圓也	愛知	安藤現慶殿
一金五圓也	滋賀	吉田龍誓殿	一金參圓也	大森	毛利一代子殿
一金五圓也	盛岡	赤澤亦吉殿	一金參圓也	山形	横尾彌門殿
一金五圓也	群馬	小林三之丞殿	一金參圓也	兩國	加藤てる子殿
一金五圓也	宮崎	岩崎深信殿	一金參圓也(第二回)	大分	松岡松治殿
一金五圓也	府下	河野純孝殿	一金參圓也	愛知	加藤丘太郎殿
一金五圓也	東京	第一高等學校徳風會殿	一金參圓也	花巻	佛教四恩會殿
一金五圓也	滋賀	羽田治平殿			

一金參圓也	上海	廣陵了賢殿	一金貳圓也	山形	渡會孫藏殿
一金參圓也	金澤	八田智證殿	一金貳圓也	廣島	大洲一毛殿
一金參圓也	愛知	那須凌岱殿	一金貳圓也	福岡	植田清三郎殿
一金參圓也	滋賀	松田益太郎殿	一金貳圓也	臺南	片山勘太郎殿
一金參圓也	牛込	小南英策殿	一金貳圓也	東京	中根流情殿
一金參圓也	岐阜	美濃島與三郎殿	一金貳圓也	大森	服部きん子殿
一金參圓也	札幌	脇川操子殿	一金貳圓也	吳	田坂道誓殿
一金貳圓也	和歌山	松永有見殿	一金貳圓也	富山	城谷隣賢殿
一金貳圓也	吳	由村繁之進殿	一金貳圓也	駒込	近藤裕子殿
一金貳圓也	同	西村團吉殿	一金貳圓也	府下	森岡としよ子殿
一金貳圓也	長野	古川現成殿	一金貳圓也	濱松	桑原なか子殿
一金貳圓也	石川	松原宗二郎殿	一金壹圓五拾錢也	大森	佐々木八十子殿
一金貳圓也	小石川	佐野川多平殿	一金壹圓參拾錢也	門司	井上桑子殿
一金貳圓也	府下	森口や才江殿	一金壹圓也	兵庫	善立寺殿
一金貳圓也	越後	須藤堅正殿	一金壹圓也	名古屋	光弘祐言殿
一金貳圓也	神戸	土井光治殿	一金壹圓也	同	佐々木俊諦殿
一金貳圓也	花巻	伊藤直治殿	一金壹圓也	同	平塚龍訓殿
一金貳圓也	愛媛	野村大次郎殿	一金壹圓也	鹿兒島	貴島徳十郎殿
一金貳圓也	新潟	横關登以子殿	一金壹圓也	香川	松岡海音殿
一金貳圓也	東京	神谷三郎殿	一金壹圓也	長崎	武宮智學殿

一金壹圓也	吳	辻村たか子殿	一金壹圓也	府下	田中俊太殿
一金壹圓也	同	檜原完殿	一金壹圓也	牛込	中村きく子殿
一金壹圓也	本郷	鈴木弘殿	一金壹圓也	盛岡	池野市太郎殿
一金壹圓也	同	清水眞一殿	一金壹圓也	福岡	古賀發志殿
一金壹圓也	天鹽	北村陽松殿	一金壹圓也	香川	糸瀨正澄殿
一金壹圓也	同	石澤初次郎殿	一金壹圓也	福岡	鍋田九五殿
一金壹圓也	同	松浦抱月殿	一金壹圓也	香川	香川晃月殿
一金壹圓也	新潟	上越佛教積善會殿	一金壹圓也	本郷	笹本治助殿
一金壹圓也	愛知	都築百太郎殿	一金壹圓也	沖繩	増子賢慧殿
一金壹圓也	山形	横尾正太郎殿	一金壹圓也	臺灣	吉岡芳太郎殿
一金壹圓也	同	山本政太郎殿	一金壹圓也	熊本	古川淨晃殿
一金壹圓也	島根	長島重代子殿	一金壹圓也	千葉	西本龍山殿
一金壹圓也	兵庫	飯田正千代殿	一金壹圓也	中野	小笠原祐英殿
一金壹圓也	府下	原妙子殿	一金壹圓也	沖繩	玉代勢法雲殿
一金壹圓也	小石川	姉崎そて子殿	一金壹圓也	山形	小林とし子殿
一金壹圓也	小倉	東條きくえ子殿	一金壹圓也	名古屋	藤田隆憲殿
一金壹圓也	朝鮮	松江賢哲殿	一金七拾五錢也	同	宮本義方殿
一金壹圓也	石見	野川佐次郎殿	一金七拾五錢也	名古屋	岡部弘觀殿
一金壹圓也	山形	横尾いを子殿	一金五拾錢也	吳	山中くら子殿
一金壹圓也	東京	川部きん子殿	一金五拾錢也	天鹽	杉本長次郎殿
一金壹圓也	本所	三浦鑛吉殿	一金五拾錢也		

一金五拾錢也	茨木	市村藤太郎殿	一金參拾錢也	滋賀	願淨寺殿
一金五拾錢也	長野	釋德治殿	一金參拾錢也	同	願陳寺殿
一金五拾錢也	山形	原田中庸殿	一金參拾錢也	同	光覺寺殿
一金五拾錢也	同	太田彌市殿	一金貳拾五錢也	天鹽	川見虎市殿
一金五拾錢也	江田島	中原清之進殿	一金貳拾錢也	同	川端庄次郎殿
一金五拾錢也	福岡	池田勝三郎殿	一金貳拾錢也	同	藤澤仁左門殿
一金五拾錢也	福岡	松尾勢太郎殿	一金拾錢也	同	伊林吉次郎殿
一金五拾錢也	同	同とみ子殿	一金拾錢也	同	池田久太郎殿
一金五拾錢也	山形	大江熊治殿	一金拾錢也	同	山本仁松殿
一金五拾錢也	山口	行村了性殿	一金拾錢也	同	黒川善之榮殿
一金五拾錢也	山形	阿部貞次郎殿	一金拾錢也	同	山本市松殿
一金五拾錢也	滋賀	丹那部願然殿	一金拾錢也	同	泉與次郎殿
一金五拾錢也	同	笠沼賢信殿	一金拾錢也	同	藤澤仁佐松殿
一金五拾錢也	同	遍増寺殿	一金拾錢也	同	猫島萬平殿
一金五拾錢也	同	極性寺殿	一金拾錢也	同	東仁太次殿
一金五拾錢也	同	淨澤寺殿	一金拾錢也	同	加藤三平殿
一金五拾錢也	府下	立木幸三郎殿	一金五錢也	同	中島與太殿
一金參拾錢也	天鹽	近正萬藏殿	一金五錢也	同	村上内方殿
一金參拾錢也	福岡	堤斗三郎殿	一金五錢也	同	山越秀吉殿
一金參拾錢也	同	堤宗市殿	一金五錢也	同	杉本内方殿
一金參拾錢也	本郷	笹本政治殿	一金五錢也	同	井口内方殿

一金五錢也
一金五錢也

同 澤田常次郎殿
同 澤田米次郎殿

總計金壹千壹百七拾九圓

四拾錢也

累計金七千貳百四拾

九圓壹錢也

右之通りに候也

明治四十五年貳月壹日

世話人總代 長尾 收一
會計監督 西澤 善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存
候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀

會館喜捨金御寄附御注意

- 一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に求道會館設立寄附金の文字及び求道會館設立會計監督西澤善七の宛名必らず御記入願上候
- 二、寄附金額取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候
- 三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷候

近角常觀著

信仰問題

第六版

菊版二百頁以上

代價一冊六拾五錢郵稅六錢

如何にして信仰を得可きかと、現時青年の叫に於て、如何なる信仰を以て社會を經營すべきかと、二十世紀の問題也、本書内篇は前の疑問に答へたるものにして、外篇は後の疑問に答へたるもの也、内篇には内的實驗の主義に立ちて現時紛糾難解せる哲學、倫理、等の關係に向て直接簡潔なる判斷を下し、宗教の眞髓を握り來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を叙するに至りて慈光春風の世に遊びて攝取の清歐米各國の宗教界及び社會事業を紹介し、翻て佛教原初の眞精神を説き、將來清新にして且つ健全なる社會的經營を誠實に來る、宗教界及び社會事業を紹介し、翻て佛教原初の眞精神を説き、將來清新にして且つ健全なる社會的經營を行記を收む趣味津津聊か讀者を慰むるに足らむか。

近角常觀師序 鈴木龍司著

入信之經路

正價三拾錢
郵稅四錢

著者は宗教家にあらず、僧侶にあらず、たゞ現代に生活し、現代の空氣に觸れ、而も、所謂近代人たるに甘んずることを得ざる一青年也。然り而して、筆をその幼時の記憶より起し、中學にありては、儒教的理想と奮闘し無我愛を信じては、進むべきの行路を得、第一高等學校の三年を経過して、文科大學に學びては、所謂灰色の人生觀に満足すること能はずして、張合のなき日暮しをかこち、遂に一件に遭遇するや、今迄の修養的立場、主觀的立脚地にてはいかにするとも安住の地を見出すこと能はず、一切の思想を捨て直ちに走りて、絕對他力の恩寵に浴し、佛陀切々の慈愛に泣く、狀二十四年の心的經過と相待つて、一の飾りなく、有の儘に告白するもの即ち本書也。衷心止むに止まれぬ欲求を持して、暗黒の裡に彷徨する眞面目なる近代青年の苦悶の跡萬人の肺腑を衝いて人をして思はず佛陀の大懷に宿らざるを得ざらしむ。世の理想なきに苦しむもの、人生問題の歸趣を得ざるに悩むの士是非一讀をす。

發行所 發行所 發行所
森江書店 森江書店 森江書店
本振郷區川町一丁目六番地
本振郷區川町一丁目六番地
本振郷區川町一丁目六番地

連枝梅上尊融師序
連枝梅上尊融師序
浩谷大枝梅上尊融師序
洞々々々々々々々々々

眞宗聖典

來出版三十補增

價特 並七錢十 製特○錢十 圓一製特○錢十
錢八稅郵○錢廿圓一上極

完全無比の眞宗聖典は編纂せられたり。初に勤行用として三部經、正信偈、和讃、御文(御文章)、等の全部を網羅し盡したり。次に信念修養の資料として、三部經和譯、教行信證和譯、歎異鈔、御一代問書、等廿四部、其他の假名聖教十數部の抜粹、七祖聖教十有餘部の抄譯あり。内容の豊富なる、装釘の優雅にして輕便なる、眞宗聖典中の大王なりとす。十一版にて約二萬部既に賣切れたれども未だ一般の要求に應ずること能はず、今回文類聚鈔和譯、愚禿鈔和譯、二門偈和譯を増補し、更に特價販賣を斷行せり。請ふこの廉價無比なる最修の特賣提供を逸する勿れ。

定價○金五錢
郵○錢六

遠くは三四百年の古より近くは明治の今日に渉り、上は一代の碩學より下は一介の野翁に至るまで、二百二十餘項の他力安心の自督の佳話を集めたのが本書である。胸ををぐらるゝ話、涙のこぼれる話、手を打つて喜ぶ。著者は家父と共に多年の苦心によりて漸く本書を編んだ。世にありふれたものと異つて一話一話が信仰味の玉である。

○金五錢
郵○錢八

親鸞聖人の傳記は數甚た多しと雖も、或は繁に過ぎ或は俗に沿て、中庸を得たるもの少し、著者見るあり、こゝに本書を著し最も謹嚴なる態度と、平易簡結の文章とを以て、聖人が一代九十年間の行迹を述べてあります。聖人が熱烈なる信念を傳へ遺憾なく振がなを附けたれば、老人幼年者も之を讀んで身は遠く聖人の膝下にある思あらん。

多田鼎著

禿義峯編

親鸞聖人

安心小話

近角常觀編著書目

人生と信仰

版三 袖郵定 稅價 四卅 本錢錢

懺悔錄

版七 袖郵定 稅價 貳廿 本錢錢

親鸞聖人の信仰

版貳 袖郵定 稅價 七十八 綴錢錢

歎異鈔

版五 袖郵定 稅價 三冊五 用錢錢

唯信鈔文意鈔

版新 袖郵定 稅價 七錢 用錢錢

申込所

東京市本郷區森川町一
振替東京一六六九六番

求道發行所

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

規定

本誌は毎月一回一日發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	一六ヶ月	一年
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢
郵稅一冊	付五厘		

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十五年一月二十八日印刷
明治四十五年二月一日發行

發行所

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂

前號要目

求道

◎救済の如來

告白

◎懺悔

江頭六郎

◎佛の相續より起る

坂口五郎



講話

◎如來の加威力

近角常觀

雜錄

◎則我善親友

近角常觀

